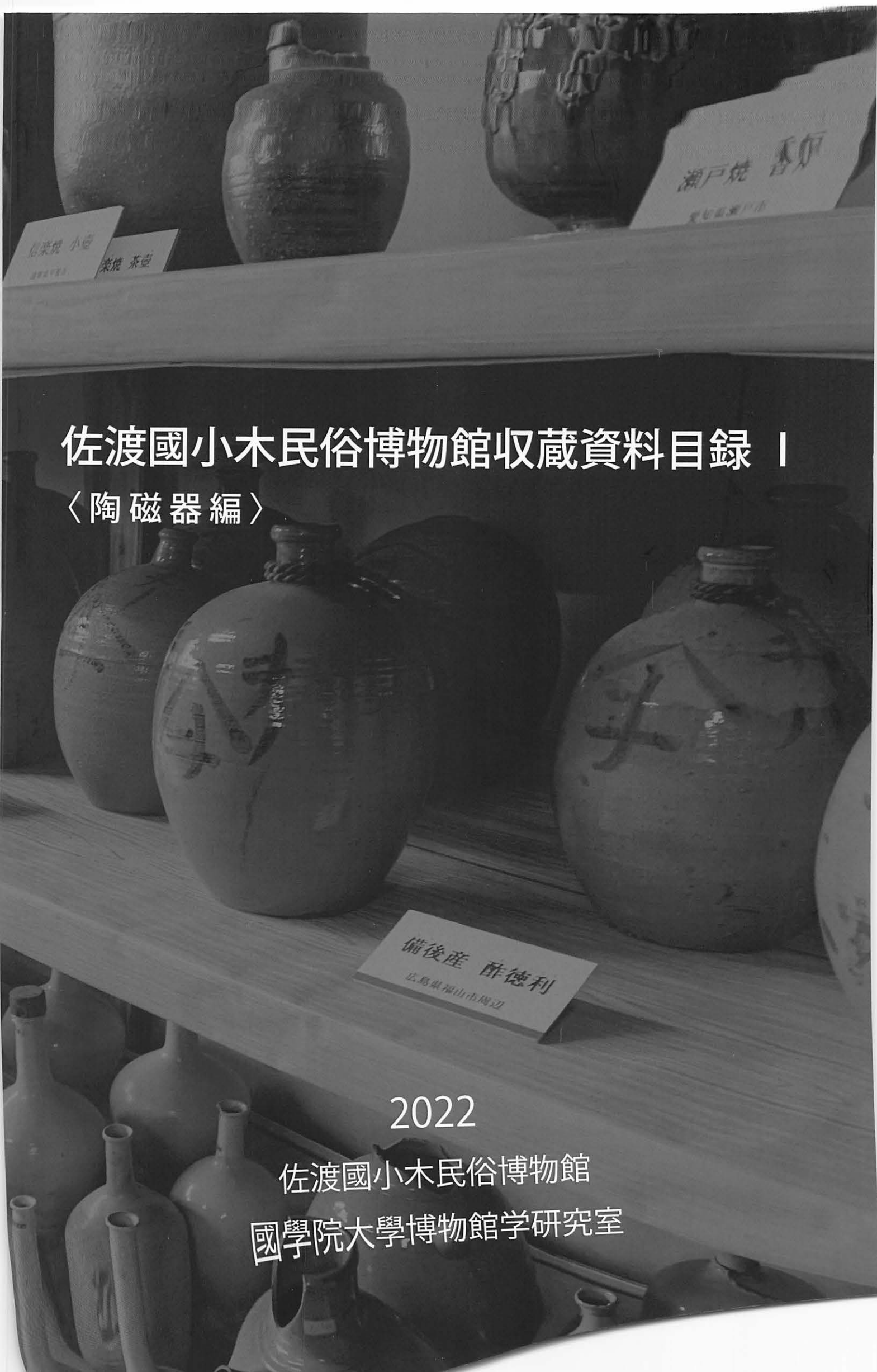




佐渡國小木民俗博物館收藏資料目錄 I

〈陶磁器編〉

2022

佐渡國小木民俗博物館
國學院大學博物館学研究室

ごあいさつ

佐渡は、平成 16(2004)年にそれまでの 1 市 7 町 2 村が合併して佐渡市となりました。市内の登録博物館は合併後も前と同じ 4 館(1 館は植物園)あります。

ご承知のように博物館は、資料の収集・保管（育成）、展示、資料についての調査研究、教育普及活動やレクリエーションに資するために必要な事業等を行うことを目的とする機関です。

合併前にはそれぞれの館で、地域の特性を生かした博物館の活動を展開してきましたのですが、合併後は諸事情から博物館としての機能や活動が停滞気味の状況です。企画展などは細々と続けていますが、基本となる調査研究や地域のニーズを把握した企画展の運営などはなかなか進んでいません。

とくに、これまでに収集した資料を整理し、その活用を考えるまでにはいたっていません。資料の整理には多くの知識と労力が必要なのですが、マンパワー不足などから後回しになっている状態です。

そうしたなか、佐渡國小木民俗博物館とかねてより親交のあった國學院大學大学院博物館学コースで、地域と協働した研究活動の実践を計画され、手始めに館蔵資料陶磁器 523 点の計測とデジタルカメラによる撮影、産地・時代などを特定した目録を作成していただきました。

今後も継続して、目録の作成やその活用などについてのご指導とご助言をいただけるとのことで、停滞している佐渡島内の博物館活動への大きな指針をお示くださるものと期待しております。

おわりにあたり、新型コロナウイルス感染症の流行のさなか、特段のご配慮のもとに調査・指導にあたられた内川隆志先生はじめ関係各位に衷心より御礼申し上げます。

2023 年 2 月

佐渡博物館・佐渡國小木民俗博物館
館長 池田哲夫

例 言

1. 本書は、令和4（2022）年度の國學院大學大学大学院博物館学コースで実施した成果報告書である。
2. 調査期間: 令和4（2022）年9月16日～20日
3. 本書の編集は、内川隆志、二葉俊弥が実施した。
4. 本書の執筆は参加者で行い、文責はそれぞれの文中に記した。

5. 本調査の組織は以下の通りである。

調査主体：國學院大學博物館学研究室（代表内川隆志）

調査指導

池田哲夫（佐渡博物館館長・佐渡國小木民俗博物館館長）

高藤一郎平（元佐渡博物館館長・佐渡國小木民俗博物館学芸員）

濱崎賢一（佐渡学センター長）

調査参加者：國學院大學専任教員

内川隆志（文学部教授）・深澤太郎（研究開発推進機構准教授）・二葉俊弥（文学部助手）

國學院大學大学博物館学コース院生

真島輕輔・張蓉（前期課程2年）・佐川果蓮・片野来実（前期課程1年）

國學院大學大学院特別研究生

時吉咲子

國學院大學学生

羽豆一朗（文学部史学科1年）

調査協力

堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室准教授）

惟村忠志（國學院大學学術資料センター共同研究員）

小池聡（大成エンジニアリング株式会社）

富永樹之（神奈川県教育委員会文化財保護課）

蒲生眞紗雄（元東京都立国際高校教諭）

鎌形慎太郎（國學院大學大学院終了）

門田岳久（立教大学観光学部准教授）

杉本浄（東海大学文化社会学部准教授）

山本哲也（新潟県立歴史博物館経営企画課課長代理）

脇本博康（株式会社吉田組埋蔵文化財調査士）

6. 研究協力者一覧（敬称略 五十音順）

相羽重徳（佐渡市世界遺産推進課）・相羽理恵（佐渡博物館）・阿部賢治（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）・池田榮史（國學院大學教授）・伊東俊祐（國學院大學大学院特別研究生）・宇治清美（國學院大學大学院博士課程後期在学）・尾崎光伸（広島県立歴史博物館）・九千房英之（あわら市郷土資料館）・吉田敏弘（國學院大學教授）

目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 歴史的・文化的環境	1
(1)小木の歴史的環境	1
(2)重要伝統的建造物群宿根木について	3
3. 佐渡国小木民俗博物館・千石船展示館について	6
(1)宮本常一と小木民俗博物館の開館	6
(2)千石船展示館について	8
(3)現状と課題	12
4. 収蔵資料の概要	14
(1)重要有形民俗文化財の概要	14
(2)民具類	16
(3)考古資料	19
5. 収蔵資料目録陶磁器編	19
(1)陶磁器の概要	19
収蔵品目録	1～81

1. 調査に至る経緯

令和2(2020)年11月、國學院大學大学院博物館学コース代表の内川隆志が、昭和58(1983)年の国指定史跡長者ヶ平遺跡の発掘調査でお世話になって以来親交のあった元佐渡博物館館長の高藤一郎平氏に、佐渡國小木民俗博物館との協働事業について相談させていただいた。同館は、大正10(1921)年に設立した旧宿根木小学校を利用し、昭和47(1972)年に民俗学者の宮本常一氏の提案・指導によって設立された登録博物館である。館蔵資料として南佐渡の漁具や民具など国指定有形民俗文化財を含む約30,000点余りが保存・公開されているが、収蔵資料の整理作業が遅れている状況にある。そこで大学院博物館学コースをあげて取組む協働研究として資料整理を進め、地域博物館としての基礎固めと活性化を目指すプロジェクトを提案させて頂いた次第である。

具体的には、館蔵資料のクリーニングを含めた再整理を実施し、資料の現状把握と目録の制作を目標として重要伝統的建造物群保存地区宿根木を要する同地域との協働による博物館活動の活性化などを推進する内容である。

令和3(2021)年6月、地元佐渡市の中核施設である佐渡博物館、佐渡國小木民俗博物館の池田哲夫館長ならびに佐渡学センター濱崎賢一センター長をはじめとした佐渡市文化行政関係各位にご挨拶を行い、事業の概要説明を実施し了解を得ることが出来た。しかしながら令和3年度の事業は、COVID19の蔓延によって見送らざるを得ない状況が発生したため次年度に持ち越しを決定した。翌令和4(2022)年6月に至って再度現地を訪問し、打ち合わせをおこない、令和4(2022)年9月16日から20日の日程でようやく事業を実施することが出来たのである。(内川隆志)

2. 歴史的・文化的環境

(1) 小木・宿根木の歴史的環境 中世から現代まで

佐渡の歴史的特性は、「相川の武家文化、小木の町人文化、国仲の公家文化」という言葉が的確に示している。このうち、「国仲の公家文化」とは、条里制により区画が整備され、国府が置かれるなど古代佐渡の中心であった国仲平野およびその周辺の様子を表す。「相川の武家文化」とは、戦国時代から開発が進んでいた鶴子銀山や江戸期に本格的な開発が行われた相川金山、江戸幕府による佐渡直轄領後に設置された佐渡奉行などの新しい行政機構などを指す。そして「小木の町人文化」とは、「相川」と同時期に金銀の輸送で少しく興隆し、後年には金山経営が悪化しその勢力が衰弱した「相川」と対照的に西回り航路の寄港地の一つとなり廻船業が活況を呈すると共に、急速に佐渡繁栄の中心地となった小木地域の隆盛の様子を表している。このように、佐渡は時代によって繁栄・発展の中心地が移り替わりながら今日まで歴史を刻んできた。

ここでは「小木の町人文化」について、宿根木地区に焦点をあててみたい。小木半島の地名が文書などに登場するのは、鎌倉時代のことである。鎌倉時代中期に発生した承久の乱以後、相模國に本領をもつ本間氏が佐渡へ入り、その勢力を強めていた。佐渡中央部、国仲に居を構えた本間氏は、1260年代に本間宣定、重久兄弟に小木半島の領地を分割して与え、そのうち宿根木には弟重久の出城が存在していた。宿根木は、古くから小木半島の要地の一つ

として捉えられていた。

しかし、鎌倉幕府滅亡に際し、島内での旧幕府と足利氏の争いが起こり、宿根木は羽茂領に組み込まれる。宿根木の出城は廃城となり、その機能は現在の小木港に近い木野浦城に統合された。天正 17 (1589) 年に上杉景勝が佐渡を支配下に置き、佐渡本間氏の殆どを滅亡すると、上杉の家臣が木野浦城に入城する。宿根木の廻船業者は本間氏統治の下、能登半島から甕や陶磁器を輸送し、銘々関係の深い在地有力者のいる港を経由してそれらを販売していたために、佐渡が上杉氏の支配下に置かれると入港できる港は小木港をはじめとした一部の港に限られてしまい、宿根木は衰退の道をたどり始めた。対照的に小木港は越後からの船舶が入港する船着き場として徐々に栄えていく。

慶長 9 (1604) 年以降、佐渡奉行大久保長安が佐渡の統治を開始すると、彼に付き従っていた原土佐が小木港の整備を進めた。小木港は水深が深いために船着き場としては優良な場所で、寛永 8 (1631) 年佐渡奉行竹村九郎右衛門により金銀を出雲崎経由で江戸方面へ輸送するルートの一部に加えられ、廻船業者が増加するなどして栄えた。しかし相川の高銀山が元和年間をピークにその採掘量が減少傾向となり、小木経由で輸送する金銀、相川へ運ぶ物資の取り扱いが減少し衰退を開始した。こうして宿根木や小木など半島一帯の港町は衰退へ向かうと思われた。しかし、寛文 12 (1672) 年に事態は好転する。荒浜 (宮城) から江戸へ東回り航路で回米を実施し実績を上げていた河村瑞軒に出羽国最上郡の天領米を江戸へ輸送するように幕府が命令し既存の西廻り航路が改正されたのだ。その過程において河村は航路設定時に小木港を寄港地の一つに指定した。したがって小木港には航路上を行き交う沢山の大型船舶が寄港し始めた。小木は物資の荷揚げと売買、薪水の補給、船頭や水主の宿の町として佐渡一の発展を遂げた。一方で、宿根木では他国船が入港することこそ殆どなかったが、人をして「この村には佐渡の金の半分がある」といわしめるほどの富を廻船業によって築いた。その要因となったのは、早期から廻船業者により松前～佐渡～上方の長大なルートが確立され、佐渡島がこのルートの中継地点にあったということに他ならない。

宿根木の廻船白山丸による交易の様子について、天明 3 (1783) 年の『諸国売買掛物商人重宝記』(個人蔵)によると、佐渡からは主な積荷である御城米、筵、なわ、干し柿などが運ばれた。また松前からはニシン、数の子、昆布など、上方からは繰綿、砂糖、織物などを買い付けて販売していたという。そこから得た莫大な利益は他国の商品を購入する費用に充当し、宿根木の人々の生活を豊かにした。それに関連して、現在宿根木の村に点在する御影石の橋、神社の灯籠は廻船業で得た莫大な富を寄進して作られたものであり、宿根木の廻船業がいかに栄えていたかを伺い知ることができる貴重な証拠である。

宿根木といえば「船大工の里」というキャッチコピーをよく耳にする。造船も寛文年間以降盛んになり、天保年間の史料には権現丸 (8 人乗り、261 石積)、天神丸 (381 石積) など計 5 隻の船が就航している様子が記されている。また、幕末期の史料には、「船大工の棟梁株は高津善太郎弟子十五人、佐藤五郎兵衛弟子八人、石塚善四郎弟子八人」とあり、これほど多くの船大工が生活しているのも、廻船業の利益がいかに莫大だったかを物語っている。また当時村には四十物屋、桶屋、紺屋などの職種があり村内の多くの職業が廻船業に関連していたのである。

明治維新により文明開化が急速に進み、内陸を鉄道、海を汽船が走るようになると廻船業も急速に衰退していく。その過程で宿根木は段丘上で農業、谷を出て漁業を行う村に変貌を遂げた。現在は宿根木の町並みが観光資源として利活用されているが、和船の高度な造船技術を持ち、廻船業で栄華を誇った村は、確かにそこに存在したのである。（羽豆一朗）

参考文献

1. 村上 昶一 他 2004『日本の町並み調査報告書集成 第4巻 中部地方の街並み〈1〉』東洋書林
2. 網野善彦 1990『海と列島文化第1巻 日本海と北國文化』小学館
3. 小木町 1973『佐渡小木町史 村の歴史上巻』小木町
4. 小木町 1973『佐渡小木町史 村の歴史下巻』小木町

(2) 重要伝統的建造物群保存地区宿根木について

重要伝統的建造物群保存地区とは、各自治体が条例などで指定した伝統的建造物群保存地区の中でも、特に重要と判断された箇所に対して国が選定したものを指し、「重伝建」と略称されることが多い。当初、伝統的建造物群保存地区として各自治体が設定することとなっているものの、登録の実態からすれば、自治体が設定した段階で伝統的建造物群保存地区となり、国に申請した段階で重要伝統的建造物群保存地区となる（申請が受理された場合）。このことから2つの保存地区制度は殆ど一体のものと考えてよい。もちろん、「重要」が頭に付くことでより多くの制約や利点が発生する。いづれにしても、指定地区においてはその保存と活用には多くの労力が必要になる。

保存地区は、その建物以外にも周囲の環境や自然物も含めて構成すると考えられており、文化庁が編集した文章のなかには次のような記述がある。

建造物の集合体である集落や町並みを群として捉え、従来の有形文化財の枠組みとは別に、伝統的建造物群という新しい文化財の類型として定義したことである。さらに、伝統的建造物群及び歴史的に一体をなす環境の広がりを経営的建造物群保存地区と定義し、伝統的建造物群の周囲の環境まで含んで面的に保護することを原則とした。（中略）加えて、庭園や社叢、河川など自然物を中心とした物件も環境物件として保護の対象とすることができるようになった。⁽¹⁾

また、建物や自然の歴史性や芸術性のみならず「歴史的風致」なる基準が存在しているが、「歴史的風致」とは建物や環境が歴史によって高次元に調和している状態を指すものと考えられ、単純に古いとか特異な様相を呈しているなどの要件ではなく、総合的な判断が求められることが以下の引用からも判断できる。

文化財としての価値の所在を、建造物が有する歴史性や芸術性ではなく、歴史的風致、すなわち長年月にわたって培われてきた建造物と環境がまとまった姿に求めたことがあげられる。⁽²⁾

重要伝統的建造物群保存地区の取り組み自体は、昭和 50 年の文化財保護法改正によって伝統的建造物群保存地区制度の制定以降、各地に同保存地区が制定されるようになり、そのなか

ら特に重要なものを指定する制度として「重要伝統的建造物群保存地区制度」が制定されたことに始まる。新たな認定は平成 19（2007）年以降であるが、既存の伝統的建造物群保存地区について、「重要伝統的建造物群保存地区」に格上げされる形で登録された。その選定基準としては、（1）伝統的建造物群が全体として意匠的に優秀なもの、（2）伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持しているもの、（3）伝統的建造物群及びその周辺の環境が地域的特色を顕著に示しているもの、上記の 3 点が挙げられている。（歴史と文化 凡例）令和 4（2022）年の段階で、43 道府県 104 市町村 126 地区が選定されており、面積は 4,000ha を超えている。ただし、各選定地区の面積には大きな差がある。

宿根木集落は、選定種別を「港町」として平成 3（1991）年 4 月 30 日に登録された新潟県唯一の重要伝統的建造物群保存地区である。面積は 28.5ha と広範囲な指定を受けており、「港町」では全国で最大の指定範囲である。実際の町並み保存に関しては、1980 年頃より地元住民が中心となって運動が行われ、平成 2（1990）年に小木町による伝統的建造物群保存地区の指定がなされた翌年に国の指定を受けた形になる。

指定されている伝統的建造物は 106 棟（建築物 106 件、工作物 16 件）を数え、その多くは二階建てであり、極めて密集して建てられている。なかには板材と石を組み合わせた石置木羽葺屋根の建物が存在しているが、この形態の屋根は国内では非常に珍しく、新潟県では他に岩船郡関川村の「渡邊邸」などでしか認められない。これらの特徴的な建築物が多く残されている背景には、宿根木の歴史が深く関係しており、山間の港町であるが故に平地が少なく、必然的に狭小の住宅が建造されることになる、また、海岸に近いこともあり建物同士の間隔が狭いほど暴風や高潮などに対する耐久性の面では有利となるからである。

宿根木集落は、江戸時代後期の全盛期において 120 軒 500 人ほどの集落を形成していた。実際に現地を訪れるとよく理解できるが、道は広くても 1～2m ほどであり、入り組んだ道の先には白山神社と称光寺がある。14 世紀頃には既に宿根木の名は文献にみられるが、住民の多くは江戸時代以降、北前船の航路に小木・宿根木が組み込まれた以降に移り住んだ者が多いとされている。もっとも、集落の中心部を流れる称光寺川はたびたび氾濫を起こしており、その度に人的・物的に大きな被害を出していたため、19 世紀以前の記録は不明確なものが多く正確な数字は定かではない。

こうした歴史的経緯があり、宿根木は指定要件の「（3）伝統的建造物群及びその周辺の環境が地域的特色を顕著に示しているもの」を満たしているとして重要伝統的建造物群保存地区に設定されている。種別は「港町」で、その指定範囲は海岸線と集落を中心に琴浦側（琴浦は含まない）の新谷岬から強清水付近（強清水は含まない）の荻ノ浦付近にまで及んでおり、宿根木海岸から見える範囲がその指定範囲とされている。また、集落の上にある旧宿根木小学校、現在の佐渡國小木民俗博物館もその範囲内としている。「港町」の指定は全国で 10 カ所ほど存在している（そのほかに「漁村」の指定も存在する）が、宿根木は指定範囲内の人家はそのほとんどが宿根木集落に集中しており、海岸線+集落+博物館という伝統的な建造物群を保存し、活用していくには理想的な条件がそろっているといえる。集落内の構成としては、通常の住宅

として使用されている建物が多くを占めている一方で、街並み案内所や複数の食事処、一棟貸しの宿泊施設が2つある。また、車で5分ほどのところに小木町の中心地がある。

小木港には直江津港からフェリーまたはジェットフォイルが運行されており、アクセス自体は悪くはないものの、佐渡の表玄関は両津港であり、佐渡観光という意味ではやや不利である感否めない。もっとも、川越や倉敷などの一部観光地を除けば重要伝統的建造物群保存地区はアクセスの便利な場所にある訳ではなく、港町や宿場町など海岸線や山間の集落などが登録されているケースが多い。これは、都市部であれば建物の更新が激しく伝統的な建造物が残りにくいなどの要因があり、自然と郊外や都市部を離れた場所が指定される傾向があるのは当然である。宿根木も海運業が盛んであった当時は交通の要所であったものの、江戸時代以降は衰退し、その結果、時代に取り残される形で伝統的な建築物群が残ったのである。指定を受けると建物の改修、特に外観の構造変更については大きな制約を受けることになるが、観光や伝統文化の保存の観点から考えると必要な制度であるといえる。

(二葉俊弥)



宿根木集落の様子



宿根木集落内の様子

参考文献

1. 文化庁編 2015『歴史と文化の町並み事典 重要伝統的建造物群保存地区全 109』

中央公論美術出版

註

- (1). 文化庁編 2015『歴史と文化の町並み事典 重要伝統的建造物群保存地区全 109』

中央公論美術出版 p.11

- (2). 註1と同じ p.11

3. 佐渡國小木民俗博物館・千石船展示館について

(1) 宮本常一と小木民俗博物館の開館について

佐渡國小木民俗博物館（以降小木民俗博物館）は、昭和 47(1972)年に小木町宿根木村の高台に開館した。建物は、大正 9(1920)年に建てられた宿根木小学校の校舎をそのまま展示室として利用し、国の重要有形民俗文化財に指定された漁具や船大工道具を中心に、南佐渡の民俗資料を展示している。

博物館の開館に当たっては、民俗学者の宮本常一(1907-1981)の果たした役割が大きい。宮本は生涯にわたり 30 回以上佐渡を訪れ調査を行い、南佐渡では 3 町村(小木・羽茂・赤泊)の地域に関わってきた。宮本が最初に佐渡を訪れたのは昭和 33(1958)年、日本民族学会と日本人類学会の連合大会に参加するためであった。翌年には九学会連合佐渡調査が始まり、その際には宿根木を訪れ、集落内にある称光寺の住職・林道明(1913-1989)を訪ねている。昭和 37(1962)年には、林が宮本を南部地区公民館主催の社会教育研究会講師として招聘し、以降宮本は博物館指導を含めた文化運動に関わることとなり頻繁に佐渡を訪れるようになる。

開館の具体的な契機となったのは、昭和 45(1970)年 3 月に宿根木小学校が閉校し、小木小学校に統合されたことである。当時は廃校舎となる宿根木小学校の活用方法として、裁縫工場の誘致や宿泊施設や観光施設にするといったような案が出ていた。⁽¹⁾しかし宮本の「郷土にあって郷土の生活文化を考える場がなければ、郷土はいつまでたっても良くならない。」⁽²⁾という考えを受け、廃校舎は民俗博物館に転用することが決定したのだった。宮本は 4 年後の昭和 49(1974)年の講演会⁽³⁾で「郷里を再評価するための拠点づくり」として佐渡國小木民俗博物館を例に出している。

もうひとつ大事なことは、地域センターを開発していくことだと思います。図書館が少ない、こういうことをまず改めなければいかん。どこでも図書館、博物館を持つべきである。じつはこれが今度の振興法で離島開発総合センターをぜひともつくるようにとういことを要望したんですが、そういうようなものが起こってくることによって、はじめて島の再評価が起こってくると思うんです。皆さんの手で、自分らの郷里を再評価していただきたいんです。われわれもこれに参加します。皆さんが問題意識を持っていれば、そういうことができるんです。

その実例は先ほどの佐渡がよいと思うんです。小木に民俗博物館があります。いま、民具を約一万三〇〇〇点ばかりばかり集めていますが、そのうち船大工の道具と磯漁の道具が、国の重要有形民俗文化財の指定を受けております。それらはその住民が集めて、そこまでつくっていったんです。それがひとつの軸になって、自分らの郷里というものはいかにあるべきか、いかに開発していったらいいか、それを考えはじめた。

宮本にとって民俗博物館をつくることは、宿根木の村人たちに郷土の文化を再考させ、地域をより良いものにしていくきっかけにすることであった。もっとも、宮本は実際に現場で指導に当たったわけではなく、地域のリーダー達にアイデアを与えていたようである。

宮本から林に宛てた葉書(昭和 45(1978)年 5 月 25 日消印)では⁽⁴⁾

「民具は集めるのが容易でないけれど、集めてみると佐渡の特色がよく出るかと思います。

いま私の学校にも二〇〇〇点あまり集めてありますが一万点を目標にしています。御地の場合でも五〇〇〇点程度はほしいものです。町民の御協力によれば可能になると思います。」とあり、集めるべき民具の数に言及している。

同じく宮本から林に宛てた書簡(昭和 46(1971)年 6 月 19 日付)では⁽⁵⁾

「民具はならべ方よりも集めの方が大切、とにかくなんでもあつめておいて下さい。整理が大変ですが、この方は追々でもよいし、何よりもあつめること。」と述べており、民具の収集は数が大事だと念を押している。宮本は昭和 51(1976)年に「先人たちの工夫を、民具から読み取るには、多数集めてみる以外に方法はない」

と述べている。⁽⁶⁾同じ種類の民具を数多く集め、形の変化を観察することにより、人々の工夫や生活の変化などがわかるからである。その民具収集の方法は佐渡においても実践された。佐渡國小木民俗博物館の展示品は宮本の助言のもと、地元の指導者と地域住民によって収集された民具である。

民具収集について

高度経済成長期末期の昭和 45(1970)年代、日本では革新的な技術や進化に関心が高まり、古いものは捨てられていった。廻船業で成り立っていた宿根木においても、不要となった古い船大工道具などが捨てられていた。それに加え、骨董ブームにより島外から古道具屋が買い付けに来るなど、このまま放置すれば宿根木の民具は散逸してしまう状況にあった。これを憂いた宮本は、住民たちに地域の歴史ある品々を集めること、博物館などの地域を学ぶ文化的施設の必要性を問いかけたことで民具を収集する動きが高まっていった。

昭和 52(1977)年に宮本は「民具分類整理の意味」で以下のように述べている。「いまひとつ、民具は何のために、誰のために集めているのだろうかということです。古い道具類が失われてゆくから、その保存のために集めるというのもありましょう。あるいは人に見せるために集めるというのもありましょう。しかし、本当に集めなければならぬ場合は、民衆の文化を明らかにしていくための手段として集めているのではないのでしょうか。」⁽⁷⁾

民具の収集は、宮本にとって佐渡の歴史を残すこと、地域住民に自分達の歴史を再認識させることだったのであろう。そういった中、宿根木称光寺住職で公民館館長でもあった林道明と公民館職員であった中堀均の 2 人を筆頭に昭和 45(1970)年 5 月、町教育委員会は博物館設立準備委員会を設け、民具収集の運動は本格化することとなった。

初めは、林と中堀が率いていた老人クラブによって民具は個人の土蔵などに集められていたが、すぐに予想を超える数となった。そこで廃校となっていた宿根木小学校に民具を置かせてほしいと小木町町長の金子繁に依頼、そのまま小学校を博物館として利用する許可も降りたという。民具を数多く収集するという宮本の考え方を受け、林と中堀はこの時期、佐渡で急速に行われていた民家の建て替えに直接出向き、廃棄されるはずだった大量の民具や文献を収集した。また林が地域住民たちに頼み込んで収集した民具も存在する。手あたり次第あつめられた収集品は数万点を超えた。⁽⁸⁾

これと同時に収集した民具を展示するにあたり、泥や埃で汚れているものの洗浄、写真撮影、計測、寄贈者の名前付ける作業、収蔵展示を行なった。この作業には地元の若者も手伝いに入

っており、現在、佐渡國小木民俗博物館を主導する高藤一郎平氏も参加していた。また先の書簡には、「場合によってはまた学生に参上させてみることにします。」とあり、実際に宮本の教え子である真島俊一、赤木紀子、吉田節子、町井夕美子ら武蔵野美術大学の学生たち、後に TEM 研究所を設立する学生らが訪れ、地域住民と共に作業にあたった。

そしてある程度集まった民具を一部展示すると、地域に住む住民が同じものが自分の家にもあるからと自主的に民具を博物館に寄贈してくれるようになったという。このように、宮本の助言とその教え子による指導、林と中堀を筆頭とする民具収集運動、そして多くの地域住民の協力によって昭和 47(1972)年 6 月 13 日、佐渡國小木民俗博物館は開館した。

翌年の昭和 48(1973)年、こうして集められた民具の中から船大工道具 968 点と漁労道具 1293 点が国の重要有形文化財に指定された。また、博物館の一部として、博物館の隣には平成 10(1998)年に国の補助金を得て原寸大で復元された「白山丸」の展示があり、あわせて小木の漁労の歴史を見ることができる施設となっている。(佐川果蓮・片野来実)

註

- (1). 高藤一郎平、門田岳久、杉本浄、2020『宿根木と宮本常一』「生活文化研究フォーラム No.1 2020」生活文化研究フォーラム佐渡 p.82
- (2). 新潟県佐渡郡小木町 1994『宿根木の町並みと民家・II』(株)TEM 研究所 p.9
- (3). 宮本常一著、田村善次郎編 2014『宮本常一講演選集 4 郷土を見るまなざし 離島を中心に』一般社団法人農山漁村文化研究 p.77
- (4). 門田岳久 2021『資料紹介 宮本常一の博物館指導』「生活文化フォーラム No.2 2021」、生活文化研究フォーラム佐渡 p.83
- (5). 註 4 に同じ p.84
- (6). 宮本常一著、田村善次郎編 2005『民具学試論 宮本常一著作集 45』未来社 p.348
- (7). 註 6 に同じ p.273-274
- (8). 註 2 に同じ p.8

(2) 千石船展示館について

佐渡國小木民俗博物館は、大正 9 (1920) 年に建てられた宿根木小学校の木造校舎を改修して利用している博物館である。本館ほかにも新館と「白山丸」展示館があり、本館と展示館は連絡通路で通じている。同館は昭和 47 (1972) 年に開館し、復元船「白山丸」を収納しつつ関連資料を展示する建物として運用されている。

① 北前船とは

北前船は、江戸時代から明治期にかけて活躍した廻船の内、日本海航路で運用された所謂「北国廻船」のことである。江戸時代になると社会の安定期に入り、経済や文化の発展が著しく、加賀藩や大阪、江戸を結ぶ航路が整備され、一部は蝦夷地にまで航路が延長されるなど、東日本航路も合わせて全国に海運ルートが整備された。18 世紀に標準的な和船として利用された弁才船を日本海向けに強化した船が一般に北前船と呼ばれる。また、単位の関係で千石船などと

呼ばれる場合も多かった。これは、近世において 100 石から 250 石が主力であった弁才船が元禄期になるにつれて大型化し、1000 石積が主力となってから便宜上「千石船」と呼ばれるようになったことがその主な理由である。つまり北前船も各種廻船も分類上では同一の弁才船であるといえる。

北前船は、前述の様に単なる物流を担うだけの存在ではなく、各地に富や文化を伝播する存在でもあった。明治以降は、鉄道など各種インフラの整備が進んだことと、西欧式のスクーナー船の普及によって徐々に数を減らしていったが、それまでの江戸から明治にかけて長きにわたり運用されてきた結果、各地にその足跡を残したのであった。特に寄港地では現在も北前船の船主住宅などが多数残されており、国や市などに文化財として登録されている。一方、北前船自体は木製であったことなどから保存は困難であり、現存する実物史料は存在せず、国内には複数の復元船が存在するのみである。

佐渡國小木民俗博物館は、主に民具や民俗資料を取り扱う博物館であるが、一方で白山丸展示館などは海事博物館といっても差し支えない館である。博物館の方は、旧校舎を改修し展示施設として活用されている館であり、その展示内容は概ね小木の民俗資料が多くを占めている。また、白山丸展示館に収蔵されている「白山丸」については、国内でも数少ないフルスケールの復元船であり、直接白山丸に乗り込める体験が可能であると共に、白山丸に関する多様な情報が集約され、展示公開されている点は、全国的にみても貴重な実践例といえる。

② 復元船の北前船

北前船は前述の様に現存する船が無い為、今日ある北前船は全て当時の設計図や絵図を参考に復元した復元船である。代表的なものは復元北前船「みちのく丸」、1/5 スケールの千石船「天神丸」、菱形廻船「浪速丸」、千石船「白山丸」などがある。この中で「浪速丸」は現存しておらず、復元されたにも関わらず再び廃棄されるという憂き目にあっている。こうした船舶の復元例は多数見られるものの、基本的に復元船を含む保存船は現役を退いた船舶を保存処理の上、博物館などで保存するものが多く、敢えて 1 から復元してその後に保存する例は少数派である。もっとも北前船に関しては現役で使用されていたのは明治期を最後に低調になり、後に使用されなくなったこともあり現存する北前船は存在しなかった。そのため、北前船は多数が復元され、スケールダウンした模型を含め前述の様に展示に活用されている。スケールダウンしたものであれば、船舶としての機能を装備しておらずとも資料としての運用はできるため、比較的多くが製作されている。一方で実際に航行できる北前船の数は非常に限られており、前述の「みちのく丸」や「白山丸」などがその代表例である。(但し「白山丸」は航海を経験していない)こうした航行可能な北前船を復元することは、学術的に非常に大きい意義があるものの、既に失われたに近い技術を使って、主流でない船舶を製造することは大きなコストがかかる。それに対するパフォーマンスが十分に期待される場合に限り製造されるので、実際に高度に復元された菱形廻船は「みちのく丸」や「白山丸」に限られる。「みちのく丸」に関しては日本海を実際に航海するなどしたため、復元船の域では極めて高度な精度をもって作成されたことが伺える。その後、両船は展示されているが「みちのく丸」は航海後に修復が行われ、野辺地漁港の常夜燈公園に野外展示されている。一方、「白山丸」は復元後に航海を経験せず、そのまま佐渡

國小木民俗博物館「白山丸」展示館にて展示されており、同時に焼物や使用された工具や制作に関するパネル展示もなされており、屋内保管な上に航海を経験していないので保存状態は非常に良好である。同施設には船主屋敷などは併設されていないが、佐渡國小木民俗博物館には、北前船に関する資料が数多く展示されており、北前船を保存し展示している施設としては国内有数の充実した施設である。

③ 佐渡における北前船と現在

佐渡は、天文 11（1542）年に鶴子銀山が発見されて以来、銀山の存在は確認されていたが、金山には慶長 6（1601）年に佐渡金山が発見され、発見とほぼ同時期に幕府の天領となる。以降は金山の整備に伴い奉行所が設置されるなど、江戸時代前期に大きく発展した。17 世紀中盤以降は、北回り航路の整備に伴い佐渡の南端にある宿根木が北前船の寄港地として整備され、金銀山と北前船の寄港地を有する佐渡は更なる発展を遂げることになる。その後、明治期に北回り航路が廃れると経済的には衰退する。

平成 29（2017）年に「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」が日本遺産に認定されたが、これは佐渡観光の起爆剤としてなったものと考えられる（佐渡市に関しては平成 30（2018）年に追加認定）。神原の論稿にもその点が指摘されており、やはり観光促進に日本遺産が大きく関わっていることは間違いない。

佐渡市は、小樽市や鰺ヶ沢町、高岡市、鳥取市、神戸市など、45 の自治体とともに、日本遺産「荒波を超えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」として文化庁から認定を受けている。文化庁では、地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として認定している。日本遺産は、このストーリーを語る上で欠かせない魅力的な有形・無形の様々な文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外へ戦略的に発信していくことで地域の活性化を図ることを目的としている。⁽¹⁾

引用にもある様に、有形無形の文化・芸能を集約して発信することで地域の活性化を図ることが目的の一つであることがわかる。

文化財活用と観光事業の促進は現在、文化財行政の重要課題であり、一部で文化財を消費財のように扱う機運もあることから文化財の観光利用には拒否反応があることも事実である。しかし、日本遺産の設定理念からすれば、“「日本遺産（Japan Heritage）」は地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産（Japan Heritage）」として文化庁が認定するものです。ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。”⁽²⁾とあることから、文化財群を整備・活用しつつ国内外に発信していくことが目的である。その点からすれば、日本遺産を上手く活用して地域活性化を図ることは、認定されるに足る文化資源のある地域にとっては懸命な選択ではないかと考えられる。

佐渡市には佐渡博物館を中心として、郷土博物館などが約 10 館程存在している。その中でも特に北回り航路や北前船について詳細に扱っているのが佐渡國小木民俗博物館である。前述

のとおり同館は、大正期に建てられた木造校舎をそのまま利用した博物館であり、昭和 47(1972)年に開館した民俗博物館である。開館に当たっては民俗学者の宮本常一の協力があつた。もともとは民俗資料を展示することが目的の博物館であつたが、千石船「白山丸」が復元されて白山丸展示館が整備されると、宿根木地域から近いこともあってか、漁労や北前船の交易について扱う史料も数多く展示され、

船大工道具が国の重要有形民俗文化財に指定されているなど、北前船の造船が盛んであつた宿根木地域よりの収蔵品が大きな要素として存在している。勿論、小木の民俗史料や考古史料、海運に関わる史料など多数が収蔵・展示されているが、隣接する白山丸展示館が新たに設置されたことなどからも、同博物館や同地域が北前船に注力していることは明らかである。こうした努力が実を結ぶ形で近年では新潟県唯一の重要伝統的建築物群保存地区（平成 3 年）や日本遺産（平成 30 年）に指定され、観光と密接に関係した地域文化・芸能の発信基地として機能していくものと考えられる。

参考文献

1. 神原理 2020「北前船をととした地域活性化の取り組み-佐渡市を中心として-」『専修大学社会科学研究所月報 NO679・680』

2. 文化庁 HP「日本遺産（Japan Heritage）」について

註

(1). 神原理 2020「北前船をととした地域活性化の取り組み-佐渡市を中心として-」『専修大学社会科学研究所月報 NO679・680』 p.22-23

(2). 文化庁 HP「日本遺産（Japan Heritage）」について | 文化庁 (bunka.go.jp)最終閲覧 2022/11/05



「白山丸」展示館



展示される白山丸

(3) 佐渡國小木民俗博物館の現状と課題

佐渡國小木民俗博物館は、その元となった大正期に建てられた旧宿根木小学校の校舎をそのまま利用し、それに加えて「新館」「白山丸展示館」が併設されている。博物館自体も昭和 47 (1972) 年開館と、長い年月を経て各所に課題が起こりつつある一方で、人材や活用面でも様々な問題を今日抱えているのが現状である。本項では佐渡國小木民俗博物館の現状と課題をハード面とソフト面で勘案する。

① 立地

佐渡國小木民俗博物館は、小佐渡の南端の港町である小木から車で数分の宿根木集落付近に設置されている。駐車場は「白山丸」展示館も合わせれば大型バスでも十分に駐車でき、道中で立ち寄り条件としては良好である。一方で佐渡の表玄関口と言えるのは両津港であり、同港から佐渡國小木民俗博物館までは車で凡そ 1 時間以上の時間がかかる。小木港にも佐渡汽船の客船が入港するが、その数は 1 日平均 2 便ほどで両津港の 6～10 便には及ばない。(便数は時期により変動がある) また、佐渡空港は令和 4 (2022) 年現在運休である。その為、多くの観光客が両津港から訪れることになるが、佐渡には数多くの景勝地やトキに関連する施設、佐渡金山関連施設などがあり、博物館も各地に 10 館程存在している。観光という限られた日数の中で小木を訪れてもらうには相応の観光客誘致活動が必要になってくる。特に佐渡金山関連施設が集中する相川との距離が約 40 km と遠く、どうしても小木や宿根木に向かう場合は「足をのばす」といった印象をうけ、日帰り客の集客は厳しい状況である。したがって、宿泊観光客の誘致に力を入れていくことが望ましい。小木にはいくつかの宿泊施設があり、宿根木にも古民家改装の宿泊施設も存在することを考えれば、泊りの観光客の定番ルートとして両津からのコースを強く提案すれば立地上の不利も克服できるのではないかと考えられる。

② 宿根木集落との関係性

佐渡國小木民俗博物館は宿根木集落に隣接しており、元々同館は廃校となった宿根木小学校の校舎を再利用したものである。それ故、同館の資料には宿根木集落に関する資料も多く、重要文化財に指定されている漁労具なども宿根木で収集したものが多数含まれる。名称こそ佐渡國小木民俗博物館であるが、小木と宿根木を中心として、復元船である千石船「白山丸」を展示する地域博物館であるといえる。よって、同館の更なる発展には宿根木集落との協働が不可欠であるといえるが、立地から既に集落と協力体制としての活動は行われており、より一層の協力が求められる。その一方で、オーバーツーリズムや予算の問題などクリアしなければならない課題は多い。

③ 施設

佐渡國小木民俗博物館の建物は、本館と新館、白山丸展示館の 3 か所に分散されるが、本館は旧宿根木小学校の校舎をそのまま使用していることから、建物自体は老朽化している。古い校舎を資料館や博物館に転用する例は全国各地にみられるが、その多くが老朽化や耐震性の問題を抱えている。佐渡國小木民俗博物館も、建物自体に歴史上の価値が高く、博物館自体が重要伝統的建造物群保存地区に指定されている上、付近の宿根木集落との調和や指定による制限を考えると外観の大規模な改修や大きな制震ブレースなどは外観上そぐわない。内装は改修で

きても建物自体の改修は非常に困難を極めるのである。また資金の問題もあり、これといった具体策を打ち出せない状態が続いているが、今後は根本的な解決策を求めていく必要に迫られることが予想される。

④運営

佐渡國小木民俗博物館におけるもっとも大きな問題は、マンパワーの不足である。開館より同館には学芸員が在籍していたが、近年は同館を主導する高藤一郎平氏が唯一の学芸員として活動しているのみである。こうした状況は佐渡國小木民俗博物館に限った話ではなく、佐渡市内にも学芸員不在の博物館や資料館は存在する。その背景には財政の問題や人材確保の問題など多くの課題が複合的に存在している上、全国的に問題視されている喫緊の課題である。しかし、学芸員不在問題については根本的な解決方法はなく、ただ学芸員を配置すればいいと述べることは容易である反面、その財源と人材の確保は並大抵の努力では実施し得ないのが地方の博物館・資料館が抱える問題点である。また、昨今非常に多くみられる雇用形態に会計年度職員採用がある。同採用方法は、限られた予算の中でも欠員補填や増員が見込める方法ではあったが、それはあくまで運営側にとって有益なのであって、多くの場合は被雇用者にとって不利に働く制度であるといえる。

⑤ 資料整理

佐渡國小木民俗博物館の収集資料は 30,000 点に及ぶとされるが、その資料の殆どはデータベース化されておらず、台帳カードなどで管理されているのが現状である。佐渡國小木民俗博物館の資料は 30,000 点に及んでいることからその作業を実施することは容易でなく、今後根気よく資料整理作業を行う必要がある。今回、主に陶磁器類の整理をおこない 523 点のデジタル化と台帳の作成が完了した。こうした作業を数年にわたり続け館蔵資料のデータベースを完成させる予定である。

(二葉俊弥)



重要民俗資料収蔵庫内



「白山丸」展示館内の船大工道具

参考文献

1. 村上 昶一 他 2004『日本の町並み調査報告書集成 第4巻 中部地方の街並み〈1〉』東洋書林
2. 南佐渡漁撈習俗調査団 1975『南佐渡の漁撈習俗 南佐渡漁撈習俗緊急調査 報告書』中島印刷
3. 小木町 1973『佐渡小木町史 村の歴史上巻』小木町

4. 収蔵資料の概要

(1) 重要有形民俗文化財の概要

佐渡國小木民俗博物館には、全体で 30,000 点余りの資料が収蔵されているが、その中でも特に重要なのが重要民俗資料に指定されている資料群である。同資料群は、船大工道具と磯舟、南佐渡の漁撈用具に大別できる。そのうち、船大工道具は 957 点、磯舟は 11 点、南佐渡の漁撈用具は 1293 点が登録されている。

船大工道具と磯船は昭和 49(1974)年 2 月に、南佐渡の漁撈用具は同年 11 月に登録され、合わせて合計 2261 点が収蔵されている。船大工道具以外の内訳、登録理由などの諸情報は以下の通りである。

南佐渡の漁撈用具の概要

1.名称	南佐渡の漁撈用具
2.内容	磯ねぎ関係用具 176 点
	釣漁関係用具 682 点
	網漁関係用具 114 点
	製造加工関係用具 164 点
	その他 157 点
	計 1293 点

3.所有者 新潟県佐渡市小木町

4.指定月日 昭和 49 年 11 月 19 日

5.指定理由

(1) 基準 重要民俗資料指定基準

1 の (2) 生産、生業に用いられるもの、及び、2 の (3) 地域的特色を示すものによる。(2) 本件は岩礁の多い地域における漁猟のために発達した南佐渡の漁撈用具の収集であり、磯ねぎ、釣、網漁など各種の漁撈用具を中心に巨細にわたってまとめたもので、漁撈の地域的特色を示すものとして重要である。

指定資料について

1.磯ねぎ関係用具 176 点

ガラスバコ (水中を見るもの)、ヤス (突くもの)、採藻用具、採貝用具、蛸取用具

2.釣漁関係用具 682 点

延縄、イカ釣り、釣針、その他の釣具

3.網漁関係用具 114 点

網漁具、タモ類

4.製造加工関係用具 164 点

桶・箆など

5.その他 157 点

船付属品 136 点

タライ船、櫓、櫂など

服装

21 点

刺子など

上記の通り、佐渡國小木民俗博物館に収蔵されている指定資料は、主に造船と漁撈に関するものであり、周辺環境、特に小木町や宿根木集落の資料を中心に構成されている。各資料は、佐渡國小木民俗博物館内の各館に収蔵展示されているが、主に新館に漁具や磯舟などが見やすい形で展示されており、その他の膨大な指定資料については、「佐渡小木重要民俗資料収蔵庫」に保管されており、一般には公開していない。

資料は分類ごとに収蔵されており、小さいものは船大工道具の1つから大きなものは数メートルの磯船がところ狭しと並べられている。重要民俗文化財の指定から半世紀近くが経ち、資料そのものの劣化や収蔵庫そのものの劣化によって保存環境は良好とはいえない、資料の整理・管理も未だ完全とはいえない状態であるため、今後は段階を踏んで資料毎の記録や保管状態の管理を徹底していくことが必要な時期に差し掛かっているといえる。(二葉俊弥)



収蔵庫 正面



収蔵庫 外観

参考文献

1. 南佐渡漁撈習俗調査団 1975『南佐渡の漁撈習俗 南佐渡漁撈習俗緊急調査 報告書』中島印刷

(2) 民具類

① 民具の収集と分類

宮本常一らによって約 30,000 点が集められた民具について、宮本は「地元の人たちの協力というのは涙ぐましいものがありまして、(中略) 地方で三万点も集めているところは、小木の宿根木以外どこにもありません。」と述べている。⁽¹⁾ 佐渡國小木民俗博物館の民具は、地元住民の協力を得て地方としては膨大な数が収集されたのである。宮本は、民具の分類において機能分類を提唱し、その区分を「農耕具、漁猟用具、畜産用具、養蚕用具、脱穀・調整用具、食料加工用具、煮焼蒸・調理用具、食用具、容器、住居用具、燈火用具、着用具、容姿用具、紡織用具、切截用具、加工用具、運搬用具、計測用具、意思伝達用具、玩具・遊戯・娯楽用具、信仰用具」としている。⁽²⁾ この中から特に数の多い、漁猟用具の漁具と信仰用具について次項で述べる。

② 展示資料の概要

1. 漁具について

南佐渡における漁業は、タラ・サメ・タイ・ブリ・フグ・サバ、一本釣りによるアラ・カマス・カレイ・アジ・セイナゴ・マスなどを対象とする延縄と、フグ・コオナゴ・イワシ・セイナゴ・アゴ・ハタハタなどを対象とする網漁、大ダコ・サザエ・アワビ・ワカメ・テングサ・磯魚などを対象とするイソネギが挙げられる。⁽³⁾

展示室には、整理分類され解説などが付された漁具と未整理のままのものがあり、分散して置かれている。例えば、タコツボについては、佐渡ではタコ漁の際にタコツボやタコバコを用いたこと、素焼きの陶器の底部に穴をあけ、水揚げの時に水が抜ける仕組みのものもあること、地域によりタコツボを嫁入り道具に持たせたことなど、漁法や婚姻の風習に関する説明がある。イワシ・アゴ・ハタハタの網漁の解説パネルの付近には、網、カゴ、タライや浜の様子が撮影された写真パネルが展示されている。漁具の種類の一部としては、アンコウ・ゲントウ・ハネザオ・テンテン・ハエナワなどのほか、ウミバコ・タモ・魚カゴ・アバ（浮子）とみられるもの、イクスカゴやコノシロと書かれた網、漁船の上のタル・ザルなどがあり、また同じ種類のものが複数ある。

2. 信仰用具について

館内には、信仰の展示スペースがあるが、主な展示品は以下の通りである。

・籠とり念仏

百万遍数珠ともいわれ、春になりワラ、カヤなどで家の周りに作られる防風の垣を取り除いた日に行われる。宿根木新田地区では、老若男女が集まり、念仏を唱えながら春の訪れを喜び合った。⁽⁴⁾

・善宝寺信仰

明治時代初期頃まで、漁業が盛んであり海上の安全と大漁を祈る善宝寺信仰が厚かった。佐渡の各地の海岸沿いには善宝寺が祀られている。⁽⁵⁾

・えびす像・大黒像

えびす棚は普通の旧家では神棚にえびす・大黒の木像一対が厨子に入って祀られ、佐渡のお

寺は、ほとんど庫裡にえびすさん・大黒さんを祀っている。宿根木のある家ではえびす・大黒を数十体土蔵二階にまとめて祀り「明治年間ちょんまげじいやんが毎朝くらの鍵を鳴らし乍らお参りに通った」という。職人の手にかかったものより素人の手作りのものが多い。⁽⁶⁾博物館には石像が展示されている。

・金毘羅信仰

宿根木の古い金毘羅さんは、称光寺境内に熊野権現、住吉明神と三体で何れも「海の神さん」として祀られていたが、明治初年の廃仏毀釈の際に、金毘羅・住吉の二社殿は、白山神社へ合併され、現在は金毘羅権現御宝前奉納の石燈籠一対が残っている。上方との往来が頻繁であったために、金毘羅信仰は島内で最も盛んであった。金毘羅権現関係の絵図・道中記、護符・お札などが豊富に残っている。⁽⁷⁾

・佐渡の遍路

全島に四国八十八ヶ所や西国三十三ヶ所の霊場が定められ、また、宿根木岩屋山の境内には八十八ヶ所と三十三ヶ所の本尊が祀られている。お寺や信心深い家の掛軸には八十八ヶ所の本尊の絵像があり、歳末のねまり遍路はこの掛軸を祀って御詠歌を唱える。⁽⁸⁾ 遍路の際に着用する笠や西国霊場の第六番札所である壺坂山南法華経寺の掛軸などが展示されている。

・その他の用具について

煮焼蒸・調理用具、食用具、容器、住居用具、燈火用具などがあり、時計が数多く収集・展示されていることも特徴的である。

③ 展示の現状と今後の課題

宮本は、林道明に宛てた書簡の中で「民具は集めるのが容易ではないけれど、集めてみると佐渡の特色がよく出るかと思います。」「民具はならべ方よりも集め方の方が大切」「何よりも数多くあつめておくこと、同じようなものがいくつあってもかまいません。」などと記している。⁽⁹⁾ また、糸車に関して、「機械へ移っていく過程が、民具を並べることによって、説明がなくても非常によくわかる。各地のものを多数集めていけば、物によって物を語らせることもできるのである。」⁽¹⁰⁾と述べ、宮本の収集する民具の数量と展示についての考え方が示されている。

本項で取り上げた民具は、収集・展示された中のほんの一部に過ぎない。関連する民具は近くに置き、同じ種類のものを大量に並べるだけでも、実際に人々に使用されてきた民具には、観る者に語りかける力があるといえる。今後は、物によって物を語らせるとともに人々の生活に根付いた物であることを示す展示の方法、および大量の民具の分類、資料保存の観点からの虫害対策や温湿度管理なども課題としてあげられる。

(宇治清美)



信仰に関する展示室

参考文献

1. 宮本常一著 田村善次郎 編 2014『宮本常一講演選集 4 郷土を見るまなざし 離島を中心に』一般社団法人農山漁村文化協会
2. 日本民具学会 編 2020『民具学事典』丸善出版
3. 宮本常一（調査団長）テム研究所編 1975『南佐渡の漁村と漁業』テム研究所
4. 佐渡市 WEB サイト
5. 門田岳久・杉本 浄・小西公大編 2021『生活文化研究フォーラム No.2 2021』生活文化研究フォーラム佐渡
6. 宮本常一著 田村善次郎編 2005『民具学試論 宮本常一著作集 45』未来社

註

- (1). 宮本常一著 田村善次郎編 2014『宮本常一講演選集 4 郷土を見るまなざし 離島を中心に』一般社団法人農山漁村文化協会 p.267
- (2). 日本民具学会編 2020『民具学事典』丸善出版 p.105
- (3). 宮本常一（調査団長）テム研究所編 1975『南佐渡の漁村と漁業』テム研究所 p.63
- (4). 佐渡國小木民俗博物館 展示室内解説より参照
- (5). 佐渡市 WEB サイト <https://www.city.sado.niigata.jp/site/bunkazai/4943.html>
- (6). 註 3 に同じ p.174
- (7). 註 3 に同じ p.184
- (8). 註 3 に同じ pp.209-210
- (9). 門田岳久・杉本 浄・小西公大編 2021『生活文化研究フォーラム No.2 2021』生活文化研究フォーラム佐渡 pp.83-85
- (10). 宮本常一著 田村善次郎編 2005『民具学試論 宮本常一著作集 45』未来社 p.349

(3) 考古資料

考古資料は、国指定史跡長者ヶ平遺跡出土の縄文時代の遺資料群である。長者ヶ平遺跡は、佐渡市小木町金田新田 126-2 に所在し、縄文時代前期末から中期後半まで続いた佐渡を代表する縄文遺跡として知られ、昭和 56（1981）年から昭和 58（1983）年の 3 ケ年に及ぶ國學院大學の発掘調査によって、住居址をはじめとした遺構と共に縄文時代前期末から中期初頭に属する遺物が多量に検出された。縄文土器は略完形個体が 37、土器片はコンテナに約 200 箱と多く、石鏃・打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石といった石器類も多数収蔵されている。中でも硬玉製勾玉は非常に貴重な遺物の一つと言えよう。その一部は新館エントランスで公開している。これらの資料は、現状では展示に供している程度であるため、今度その活用方法の検討をおこなってゆく予定である。

（内川隆志）

5. 収蔵資料目録陶磁器編

(1) 陶磁器の概要

収蔵されている陶磁器は総数 352 点である。その大半は、本館第 6 展示室に収められ、一部は白山丸展示館に分散して展示公開されている。今回の事業では、収集されている全ての陶磁器類を分類整理し目録化を図り、その内容について明らかにすることを目的とした。陶磁器は、時代、製作地を明確にできるものが多く、宿根木を中心とした小木地区にいつ、どこからもたらされたものかという問題の解決は、北前船の商業活動の検証に直結する点も、先ず陶磁器の整理を優先した理由である。一方、陶磁器は古美術としての価値を有するアイテムである点は、より古く希少性のあるものはすでに散逸してしまっていることも念頭におく必要がある。この点は、陶磁器類の大半が 19 世紀以降のものが多い点からしても頷けるところであろう。18 世紀以前に遡る大形の水甕などは流出を免れて現存している点は、18 世紀以前にも他地域からの多くの陶磁器が搬入されていたことが証明できるものとして重要である。今回、全ての陶磁器について時代、産地を概ねあきらかにできた訳であるが、その同定に関しては地元佐渡をはじめ、越前、石見、備後など各地域の研究者に多大なご教示を賜った点は、この場をかりて心より御礼申しあげる次第である。今回は収蔵資料の総体が理解できるよう目録化を目指したものであるため、各地域におけるより詳細な研究については今後推進すべき課題であり、北前船の商業活動の一端を明らかにする上でも極めて重要な点である。また、同時に研究を推進している佐藤伊左衛門家文書の整理から、各地域の商家との陶磁器売買の仕切書などの発見も大いに期待できるところであり、より具体的な商売の内容が明らかになるであろう。

地域別にみた陶磁器の概要

越後・越中・佐渡（図 1）

地元佐渡や越後の陶磁器は 11 点と少ない点は北前船の拠点である佐渡の特徴である。越後には 50 ヶ所近くの近代窯が知られ、どの窯で生産されたものかについての詳細は不明である。佐渡の陶磁器では、初代黒沢金太郎により寛政 12 年（1800）に創始され、以来明治初期まで約 70 年間続いた金太郎焼（図 2 - 2・3）が認められた。

瀬戸（図 3 ～ 図 6）

瀬戸の製品は 30 点認められる。時期的には、20 世紀の爛徳利や小坏などが多いが、火鉢（図 5 - 23）や甕類（図 5 - 24～27）湯たんぽ、陶枕なども認められる。

常滑（図 7）

常滑の製品は 4 点あり、焼酎甕や甕が認められる。

信楽系（図 8）

信楽系は 7 点あり、19 世紀 - 20 世紀に比定される壺・甕・瓶・土瓶・ランビキなどが認められる。

丹波（図 9）

丹波の製品は 2 点あり、19 世紀 - 20 世紀に比定される甕、大瓶が認められる。

出石系（図 10）

出石系磁器は 5 点認められ、いずれも 19 世紀 - 20 世紀に比定される大振りの爛徳利である。

石見（図 11 ～ 図 19）

石見の製品は、総数 74 点認められ、全陶磁器の 14% を占め最も多い。19 世紀 - 20 世紀に比定され、器種は大瓶・片口・練鉢・摺鉢・甕・爛徳利・瓦・尿瓶なども認められる。

備前（図 20～図 23）

備前の製品は、総数 29 点認められ、19 世紀 - 20 世紀に比定され、器種は甕類・瓶類といわゆる布袋徳利（図 20 - 4～18）が特徴的である。ただし備後皿山窯の製品が混在している可能性もある。

備後・鞆皿山焼（図 24～図 25）

鞆皿山焼の製品は 19 世紀 - 20 世紀に比定される大ぶりの酢徳利 13 点が確認できる。

豊前・高取（図 26）

高取の製品は、19 世紀 - 20 世紀に比定される大甕が確認できる。

唐津（図 27～図 31）

唐津の製品は、18 世紀を主体とした大甕や播鉢・壺類を主体として後期唐津の武雄系陶器（図 31 - 1・2）も確認できる。他の磁器類に比べて時期的に古い様相を呈している。

肥前・伊万里（図 32～図 52）

肥前（伊万里）の製品は 174 点認められ、陶磁器全体の 33% を占めるが、軍盃（図 51 - 162 ～168）のように瀬戸の可能性も認められる資料など、明確に伊万里と判断できないものも含まれている。時期的には 19 世紀 - 20 世紀に比定されるものが多いが、17 世紀後半～18 世紀初頭に属する大皿（図 42 - 87）など、江戸時代前期後半に遡る製品も遺存している点は注目すべきであろう。いずれにしても多量の伊万里製品が流入している点は事実であり、器種は、大瓶・中瓶・小瓶・神酒徳利・猪口・小鉢・中鉢・仏花瓶・中碗・盃洗・盃台・小皿・中皿・大皿・角皿・段重など多様である。北前船による陶磁器流通にも伊万里の営業力の高さが窺えるところであろう。

肥前・波佐見（図 53）

肥前（伊万里）の製品は、18 - 19 世紀に比定される青磁の中碗（蓋付）や灰落しが認められる。

豊後 小鹿田 (図 54)

小鹿田の製品は、18 世紀-19 世紀に比定される大瓶が 1 点確認できる。

九州系 (図 55～図 59)

唐津・高取・薩摩・小代・八代・小石原・小鹿田など九州各地で生産された製品を一括して示した。概ね 18-世紀から 9 世紀に比定されるもので、器種は、甕類・水注・油德利・中瓶・大瓶・湯たんぽなど鉄釉を施したものが多い。

琉球 壺屋 (図 60-1) 外国 中国 (図 60-2)

19 世紀に比定される壺屋焼の壺と口縁部を欠く四耳壺は、中国の製品と見做されるが、産地についての詳細は不明である。(内川隆志)

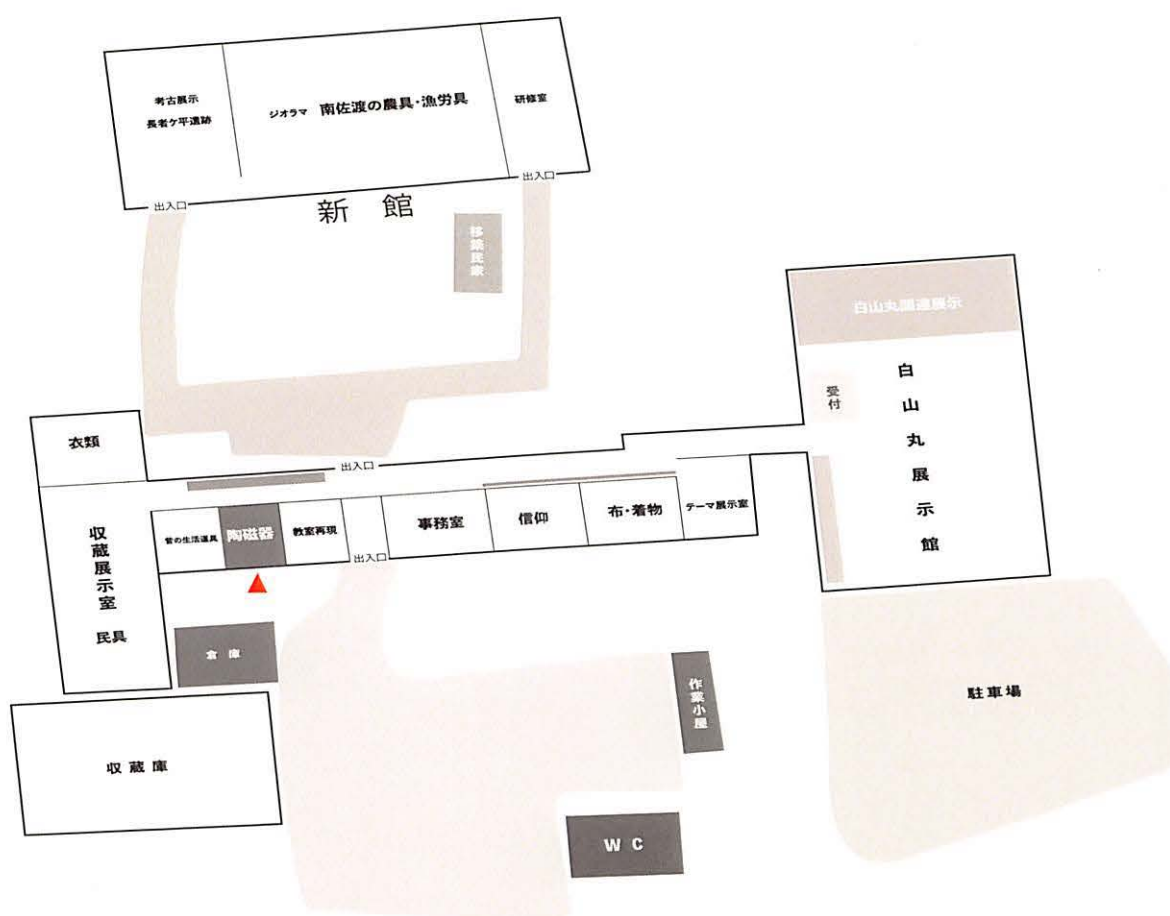
収蔵品目録



航空写真 (Map data ©2023 Google)



佐渡国小木民俗 正面



平面図 (▲ 陶磁器展示室)



陶磁器類展示の状況



1



2



3



4



5



6



7



8

図 1-1 越後・越中瀬戸



図 1-2 越前



1



2



3

図2 佐渡



1



2



3



4



5



6



7



8



9

图3 瀬戸 (1)



10



11



12



13



14



15



16



17



18

图4 瀬戸 (2)



19



20



21



22



23



24



25



26



27

图5 瀬戸 (3)



28



29



30

図6 瀬戸 (4)



1



2



3



4

图7 常滑



1



2



3



4



5



6



7

图8 信楽系



1



2

図9 丹波



1



2



3



4



5

图 10 出石系



1



2



3



4



5



6



7



8



9

図11 石見(1)



10



11



12



13



14



15



16



17



18

图12 石見(2)



19



20



21



22



23



24



25



26



27

図13 石見(3)



28



29



30



31



32



33



34



35



36

图14 石見(4)



37



38



39



40



41



42



43



44



45

図15 石見(5)



46



47



48



49



50



51



52



53



54

图16 石見(6)



55



56



57



58



59



60



61



62



63

図17 石見(7)



64



65



66



67



68



69



70



71



72

図18 石見(8)



73



74

図 19 石見 (9)



1



2



3



4



5



6



7



8



9

图20 備前 (1)



10



11



12



13



14



15



16



17



18

图 21 備前 (2)



19



20



21



22



23



24



25



26



27

图 22 備前 (3)



28



29



1



2



3



4



5



6



7



8



9

図24 備後・鞆皿山焼(1)



10



11



12



13

図 25 備後・鞆皿山焼 (2)



1



2



3



4



5



6



7

图 26 高取



1



2



3



4



5



6



7



8



9

图 27 唐津 (1)



10



11



12



13



14



15



16



17



18

图28 唐津(2)



19



20



21



22



23



24



25



26



27

图 29 唐津 (3)



28



29



30



31



32



33



34



35

图30 唐津(4)



36



37



38

图 31 唐津 (5)



1



2



3



4



5



6



7



8



9

図 32 肥前・伊万里 (1)



10



11



12



13



14



15



16



17



18

图 33 肥前・伊万里 (2)



19



20



21



22



23



24



25



26



27

图 34 肥前・伊万里 (3)



28



29



30



31



32



33



34



35



36

图 35 肥前・伊万里 (4)



37



38



39



40



41



42



43



44



45

图 36 肥前・伊万里 (5)



46



47



48



49



50



51



52



53



54

图 37 肥前・伊万里 (6)



55



56



57



58



59



60



61



62



63

图 38 肥前・伊万里 (7)



64



65



66



67



68



69



70



71



72

图 39 肥前・伊万里 (8)



73



74



75



76



77



78



79



80



81

图 40 肥前・伊万里 (9)



82



83



84



85



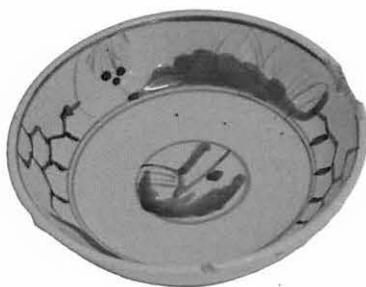
86



87



88



89



90

图 41 肥前・伊万里 (10)



91



92



93



94



95



96



97



98



99

图 42 肥前・伊万里 (11)



100



101



102



103



104



105



106



107



108

图 43 肥前・伊万里 (12)



109



110



111



112



113



114



115



116



117

图 44 肥前・伊万里 (13)



118



119



120



121



122



123



124



125



126

图 45 肥前・伊万里 (14)



127



128



129



130



131



132



133



134

图46 肥前・伊万里(15)



135



136



137



138



139



140



141



142



143

图 47 肥前・伊万里 (17)



144



145



146



147



148



149



150



151



152

图 48 肥前・伊万里 (18)



153



154



155



156



157



158



159



160



161

图 49 肥前・伊万里 (19)



162



163



164



165



166



167



168

图 50 肥前・伊万里 (20)



169



170



171



172



173



174



175



176

图 51 肥前・伊万里 (21)



1



2



3



4



5



6



7



8

图 52 肥前・波佐見



1

图 54 豊後小鹿田



1



2

图 55 九州系 (1)



3



4



5



6



7



8



9



10



11

图 56 九州系 (2)



12



13



14



15



16



17



18



19



20

图 57 九州系 (3)



21



22



23



24



25



26



27



28



29

图 58 九州系 (4)



30



31



32

图 59 九州系 (5)



1



2

图 60 琉球壺屋・中国



1



2

图 61 產地不明 (1)



3



4



5



6



7



8



9



10



11

图 62 产地不明 (2)



12



13



14



15



16



17



18



19



20

图 63 产地不明 (3)



21



22



23



24



25



26



27



28



29

图 64 产地不明 (4)



30



31



32



33



34



35



36



37



38

图 65 產地不明 (5)



39



40



41



42



43



44



45



46



47

图 66 產地不明 (6)



48



49



50



51



52



53



54



55



56

图 67 產地不明 (7)



57



58



59



60



61



62



63



64



65

图 68 產地不明 (8)



66



67



68



69



70



71



72



73



74

图 69 产地不明 (9)



75



76



77



78



79



80

图 70 产地不明 (10)

収蔵品目録（一覧表）

番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	越後	中瓶	19-20C	4.2	23.7	7.2	13.3		950	17236
2	越後	中瓶	19-20C		20.2	7.5	12.3		850	6660 口欠け
3	越後	注瓶 (木栓付)	19-20C	3.6	23.6	8.5	12.3		950	6622 7-218
4	越後	中瓶	19-20C	20.5	19.5	6.3	12.6		900	13654
5	越後	中瓶	19-20C	4	21.1	8.7	11.3		700	6702
6	越後	中瓶	19-20C	4.9	24.7	9.7	10.9		1100	6722
7	越後か	中瓶	19-20C	3.7	23.9	8.8	11		850	6724 7-173
8	越中瀬戸	壺	19C	13.5	11.7	8.9	14.2		800	
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	越前	壺	18-19C	24.8	30.5	14.3	28.2		7800	
2	越前	壺	18-19C	16	24	15.2	23		3750	
3	越前	練鉢	18-19C	35	15.7	21.9			4200	
4	越前	壺	18-19C	39	45	17.5	42.3		11700	
5	越前	壺	18C	27.5	36	15	33.5		9000	1219 小木博
6	越前	ごま炒り	20C		23.3		9.6	3.1	400	3387 7-14
7	越前	大壺	18-19C	88.7	80	19			不詳	9822
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	佐渡	中瓶	19-20C	5.6	24.7	11.2	12.3		1500	6717 7-172 金太郎焼き
2	佐渡 (金太郎焼)	花入	20C	10.5	23	10.4			1650	7-155
3	佐渡 (金太郎焼)	花入	20C	12.5	22.3	12.9			1900	6695 7-13? S47.2.3
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	瀬戸	燗德利	20C	3.6	16.5				200	
2	瀬戸	燗德利	20C	2.5	14.3	4.8	6.7		200	198~206セット
3	瀬戸	燗德利	20C	2.7	14.2	4.8	6.8		200	198~206セット
4	瀬戸	燗德利	20C	2.7	14.2	4.8	6.7		190	198~206セット
5	瀬戸	燗德利	20C	2.6	14.3	4.7	6.7		190	198~206セット
6	瀬戸	燗德利	20C	2.7	13.9	4.7	6.7		170	198~206セット
7	瀬戸	燗德利	20C	2.5	14	5	6.7		150	198~206セット
8	瀬戸	燗德利	20C	2.8	14.2	4.7	6.7		190	198~206セット
9	瀬戸	燗德利	20C	2.4	14.3	4.8	6.7		190	198~206セット
10	瀬戸	燗德利	20C	2.6	13.9	4.3	6.9		150	
11	瀬戸	燗德利	20C	2.7	15.1	5.8	6.2		200	印判
12	瀬戸	燗德利	20C	2.3	14.2	4	6.3		150	
13	瀬戸	小杯	20C	7.9	4.6	3.8			100	5030
14	瀬戸	小杯	20C	8.9	5.2	3.7			110	3358
15	瀬戸	小杯	20C	8.3	3.9	2.8			100	3367
16	瀬戸	小杯	20C	8.6	4.2	3.4			110	3360
17	瀬戸	小杯	20C	8.6	3.9	2.9			100	3320
18	瀬戸	小杯	20C	8.9	4.2	3			90	3356
19	瀬戸	小杯	20C	7	3.4	2.7			60	
20	瀬戸	小杯	20C	7.1	3.3	2.6			80	
21	瀬戸	小杯	20C	7.3	3.2	2.8			70	3368
22	瀬戸	小杯	20C	7.1	3.4	2.6			80	
23	瀬戸	火鉢	19C		17.5	21	27		3800	
24	瀬戸	壺	20C	20	24.5	17	24.8		4200	
25	瀬戸	壺	20C	29.5	27	15.5	29.7		3900	
26	瀬戸	壺	20C	18	15.8	12.8	18.7		1400	13376 底部穿孔
27	瀬戸	小壺	20C	7.8	10.2	7.5	10.5		300	17235
28	瀬戸	中壺	18C		12.3	6.5	13.9		750	
29	瀬戸	湯たんぼ	20C				20.1	24.3	1700	
30	瀬戸	陶枕	19-20C		10		10.5		900	長さ: 20.5 小木町 55年6月23日 中堀均
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考

1	常滑	焼酎壺	19-20C	9	41.5		28.9		12900	16016 付札：品名 しょうゆカメ／收藏 年月日 H19年6月 15日／寄贈者 羽茂 大石94 古屋市晴
2	常滑	焼酎壺	20C	9.8	42	24.7				12900 平成19年6月 19日 寄贈者住所： 羽茂大石94 古屋市 晴
3	常滑	壺	20C		43.5	19.2	32		10300	
4	常滑	焼酎壺	20C	9.8	42	24.8				重量計測不能
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	信楽	壺	19C	8.9	17.2	8.2	13.9		850	
2	信楽	壺	19C	21.7	42.2	13.5	29.3		6000	
3	信楽	壺	20C	20.7	18.9	13.7	21.3		2200	
4	信楽	壺	19C	21.4	41.7	13.5	29.4		6200	
5	信楽か	瓶	19-20C	3.2	13.2	8.9	10.7		200	8237
6	信楽系	土瓶	19-20C		14.3	8.2	13.7		500	蓋含む 13359
7	京・信楽系	ランビキ	19-20C	8.5	13	15.7			1000	
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	丹波	壺	19-20C	25.4	28	17.4			2900	
2	丹波	大瓶 (木栓付)	19-20C	9.3	35.7	15.9	20.3		4700	6728 赤ドベ
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	出石焼系	燗德利	19C	4.4	24.5	9.5			600	
2	出石焼系	燗德利	19C	3.6	23.5	7.6			400	付札：名称 伊万里銚 子花文 (五合入)／ 採集地 小木町朝日町 ／採集年月日 56年 6月2日／寄贈者 笠 井正昭
3	出石焼系	燗德利	19C	3.6	23.3	7.2			500	付札：採集年月日 61 年7月16日／寄贈者 白坂町 影山岩吉殿
4	出石焼系	燗德利	19C	3.6	21.2	7.6			500	6755
5	出石焼系	燗德利	19C	3.6	21.5	7.4			300	
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	石見	中瓶	19-20C		25.1	10.2	15.6		1100	4991 口縁欠
2	石見	中瓶	19-20C	3.9	23.4	10.3	14.6		800	7555
3	石見	中瓶	19-20C	3.9	23.3	9.8	14.9		1000	6600
4	石見	大瓶	19-20C	5.6	26.2	9.5	19.3		1500	6701 藁縄付
5	石見	大瓶 (注口付)	19-20C	9.5	37.2	12.9	26.9		3800	6599
6	石見	大瓶 (注口付)	19-20C		30.9	13	25.5		3500	6732
7	石見	片口	19-20C	22.6	11	10.9			1000	3482 陶器室中列に 展示
8	石見	片口	19-20C	17.9	9.2	9.3			650	陶器室中列に展示
9	石見	片口	19-20C	21.2	10.3	11.5			1200	以下、壁棚の中段
10	石見	片口	19-20C	21.8	9.4	10			1000	付札：S51.10.25 片 口 中町新宅寄贈
11	石見	片口	19-20C	21.8	11.1	11			900	
12	石見	片口	19-20C	18.9	9.1	9.6			750	9343
13	石見	片口	19-20C	22.6	11.3	10.9			1400	9342
14	石見	片口	19-20C	17.9	8.5	8.3			650	底面に墨書「十」
15	石見	片口	19-20C	22.4	12.3	11.1			1300	付札：名称 瀬戸片 口／採集地 宿根木 ／採集年月日 56年 4月14日／寄贈者 中町新宅
16	石見	片口	19-20C	14.3	6.2	6.9			300	14697
17	石見	練鉢	19-20C	18.1	8.3	9.2			700	14768

18	石見	練鉢	19-20C	25.1	11.5	15.4		1600	4929
19	石見	練鉢	19-20C	23	9.8	12.4		1200	
20	石見	練鉢	19-20C	37.1	17.6	19.4		3600	4927底面に「石見焼 ○に小 製」の刻印 あり
21	石見	練鉢	19-20C	31.8	12.5	17.2		3000	6362
22	石見	練鉢	19-20C	27.5	12.9	16.7		2300	
23	石見	練鉢	19-20C	29.1	12.3	15.2		2100	
24	石見	練鉢	19-20C	29.6	13.3	15.1		2500	以下、壁棚の下段
25	石見	練鉢	19-20C	36.6	14.9	19		3900	底面に墨書
26	石見	練鉢	19-20C	35.6	15.2	18.5		4850	11760
27	石見	練鉢	19-20C	31.2	15.7	15.6		3000	
28	石見	練鉢	19-20C	34.5	15.5	18.5		3900	280 底部に山に 「上 弥」 付札： 品名 こねばち／収 蔵年月日 14年3月 ／寄贈者 宿根木 鍛冶屋
29	石見	練鉢	19-20C	29.5	13.3	16.7		2700	底面に墨書「三八 ○」
30	石見	練鉢	19-20C	35.6	13.6	16.8		3700	
31	石見	練鉢	19-20C	36	15.5	19.1		4450	026 付札：品名 こねばち／収蔵年月 日 14年3月26日／ 寄贈者 宿根木 鍛 冶屋
32	石見	練鉢	19-20C	31.5	13.5	15.2		3000	7-284
33	石見	練鉢	19-20C	37.2	16.1	16.7		3400	
34	石見	練鉢	19-20C	32.6	12.4	14.9		2500	
35	石見	練鉢	19-20C	35.1	14.9	13.6		2800	口縁欠
36	石見	練鉢	19-20C	36.6	14.5	19.5		4400	
37	石見	蓋付甕	19-20C	20 19.7	21.1 5.2	18.5		2900(身) 600(蓋)	6420
38	石見	甕	19-20C	28	27.6	12.7		3900	14484
39	石見	甕	19-20C	21.9	21.8	11.9		1900	7-282
40	石見	甕	19-20C	16.7	21.1	16.5		2700	
41	石見	爛徳利	19-20C	2.8	25.6	8		350	6687
42	石見	爛徳利	19-20C		24.3	8		350	6685 口縁欠
43	石見	爛徳利	19-20C	2.7	23.7	7.5		350	6686
44	石見	爛徳利	19-20C		26.2	7.4		500	6756 口縁欠
45	石見	甕	20C	36.7	36	21	33.9	13000	6576・7-283 底面 に墨書「小木町 鍵 と 笠井俊江」
46	石見	甕	20C	26.3	22.4	17.2		3700	14088
47	石見	甕	20C	23.7	22.7	12.5		2300	付札：品名 茶褐色 壺／採集地 小木町 旭町／採集年月日 56年6月2日／寄贈 者 笠井正昭
48	石見	甕	20C	36.9	34	19.1		9800	
49	石見	甕	20C	28.7	24.5	14.4		3800	9825
50	石見	甕	20C	21.2	19.3	15.5		2500	底面に墨書「羽茂 (一ノ瀬) 寄贈」
51	石見	甕	20C	40.2	43.2	15.5		13000	
52	石見	甕	20C	24.1	20.5	17.7		3400	7-281 竹のタガ有
53	石見	甕	20C	22.1	18.3	15.2		2150	
54	石見	甕	20C	37.5	33.6	21		11000	6578 底面に墨書 読めないのので写メし た

55	石見	壺	20C	15.5	14.2	10.7			900	
56	石見	壺	20C	13	11.7	8			600	
57	石見	壺	20C	13	10.5	8.3			800	
58	石見	壺	20C	34.4	30	19			7600	
59	石見	壺	20C	25.6	23	16.6			3600	
60	石見	搥鉢	19-20C	36	16	17			3500	
61	石見	搥鉢	19-20C	36.2	16.5	15.7			4100	
62	石見	搥鉢	19-20C	34.7	13.7	16.2			3150	
63	石見	搥鉢	19-20C	35.9	16.7	16.9			4650	付札：採集地 小木町東町／採集年月日 62年9月3日／寄贈者 荒木健一／採集者 中堀均
64	石見	搥鉢	19-20C	25	10.2	12.5			1200	14769
65	石見	搥鉢	19-20C	29.6	10.7	12.5			2200	
66	石見	搥鉢	19-20C	33.8	13	16.7			2900	
67	石見	搥鉢	19-20C	47	16.5	18.9			6600	
68	石見	鬼瓦	19-20C		25.5		36.9	7.6	4800	
69	石見	鬼瓦	19-20C		24.5		37.4	7.3	4850	
70	石見	壺	18-19C	38	35.7	20	39.6		11650	
71	石見	小壺	20C	10.5	12.2	8.3	14.6		700	
72	石見	壺（木蓋付）	19-20C	26	24	20.7	27.5		3800	
73	石見	尿瓶	19-20C		12.9	14.6	16.3		2150	9116
74	石見	大壺	18-19C	77	65	21			不詳	
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	備前	蓋付壺17:2217:22	19-20C	18.5 14.3	13.5 0.4	11.0			1500 (身) 250 (蓋)	
2	備前	壺	19-20C	25.4	20	15.8			4400	
3	備前	角瓶	19-20C	4.3	26.8	10.7			1500	15811 中列棚下段にあり
4	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	2.7	17.8	7.2			550	6683 以下、ガラス棚下段
5	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	3.5	19.6	6.9			550	6691
6	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	3.4	21.9	8.4			900	6720
7	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	2.4	19.9	6.1			550	
8	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	2.9	22.5	7.8			750	4405
9	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	2.9	18.9	7.2			600	6694
10	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	3	19.6	7.5			600	6659
11	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	3.7	20.7	7.2			700	
12	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	3.2	21.5	7.2			800	7-2以下不明
13	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	3.2	24.3	7.5			1100	6653
14	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	3.1	19.7	5.7			500	6693
15	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	3.2	21.8	5.5			750	6688
16	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	2.8	15.3	4.8			300	3404、7-125
17	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	3.3	22.7	7.1			700	40 木栓付
18	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	3.4	21.6	7.5			1100	6692
19	備前	中瓶	19-20C	3.5	22.8	10.9			1250	6666
20	備前	中瓶	19-20C	3.7	21.6	11.1			1300	6684、7-182
21	備前	角瓶	19C	3.7	21.3	7.6			600	7-158
22	備前	中瓶（布袋徳利）	19-20C	3.2	21.8	7.6	10.3		1000	6714 7-30
23	備前	中瓶	19-20C	3.5	22.3	10.7	13.7		1500	
24	備前	大瓶（木栓付）	19-20C	5.5	32.1	14.9	18.6		3900	6650
25	備前	壺	18C	28.2	32.5	19.2	31.5		12500	6436
26	備前	大瓶	19C	6	27.3	15.2	17.7		3600	6730
27	備前	大瓶（木栓付）	19C	7.7	33.5	15.5	18.2		5400	椎口様より 46.3.17 2083
28	備前	大瓶（木栓付）	19-20C	4.3	35.5	11.7	18.7		4100	6658
29	備前	大瓶	19-20C	9.5	36.7	15.4	18.3		5100	2086
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考

1	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C	4	38.2	13.5	22.3		4900	10571 山に「ヲ」? 木栓付
2	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C	5.9	37.5	13.2	22.5		4400	6647 山に「ヲ」?
3	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C	5.3	34.7	12.6	20.7		4100	山に「ヲ」?
4	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C	6.4	39.7	14.5	25.5		4400	2085 山に「ヲ」?
5	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C	5.5	36.3	12.9	21.5		4200	山に「ヲ」?
6	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C		33.9	13.2	23.2		5500	口縁欠 山に「ヲ」?
7	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C	4.5	34.1	10.9	20.5		3300	山に「ヲ」?
8	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C	6	37.2	12.1	22.5		4200	木栓付 山に「ヲ」?
9	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C	4.5	35.3	12.9	21.4		5400	6499 木栓付 備後鞆津
10	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C	4.9	36.2	12	21.6		5100	木栓付 備後鞆津
11	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C	5.5	37.3	9.5	24.3		4400	山に「ヲ」?
12	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C	5.2	38.5	12.3	21.7		4700	6715 7-165
13	備後(鞆皿山焼)	大瓶 (酢德利)	20C	5.6	38.5	14.9	19.5		5500	
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	高取	壺	18-19C	18.2	15.5	10			1250	宿根木 56年3月19日 坂下(春日)
2	高取	壺	18-19C	16	16.9	9.9	16.5		1100	6573
3	高取	壺	18-19C	24.6	34.7	13.5	27.3		5000	
4	高取	壺	19-20C	16.7	16.7	9.1	1100			
5	高取	壺	18-19C	20.1	19.3	10.6	21		2250	
6	高取	壺	19C	29	30.5	13.5	30.3		4400	7-152
7	高取	壺	19-20C	20.2	24.5	10.2	20.3		2050	7-234
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	唐津	壺	18C	20	28.2	14	19.8		5000	以下、壁棚下段
2	唐津	壺	18C	33	41.5	15.5	29		7200	
3	唐津	壺	18C	22.5	38	17.2	28.7		6800	7-209 付札:「ヲノミチ 大德利 宿根木 46.11.16 青木幸一」
4	唐津	壺	18C	31.9	45	16.5	32.5		10400	
5	唐津	壺	18C	20.2	33.5	13.7	21.9		5300	
6	唐津	壺	18C	29.9	38.5	16.2	29.3		9300	7-266
7	唐津	壺	18C	32.8	44.5	16.5	31.5		11400	
8	唐津	壺	18C	34.2	48	19.3	35.4		13000	重量計測オーバーにつき概算
9	唐津	壺	18C	41	64	27	45.5			9823 重量計測不能
10	唐津	壺	18C	50.9	77	26	55.5			重量計測不能
11	唐津	壺	18C	51.5	85.5	30.5	59.5			重量計測不能 付札: 名称 カメ/使い方 みそ用/収蔵年月日 2005年2月17日/寄贈者 佐渡市宿根木115番地 吉川国男 (かぎや)
12	唐津	壺	18C	47.2	68	26.8	52.3			重量計測不能
13	唐津	搥鉢	18C	29.3	12.2	12.2			1800	
14	唐津	搥鉢	18C	32	14.3	11			2400	
15	唐津	搥鉢	18C	24	9.8	10.4			1100	番号判読不能
16	唐津	搥鉢	18C	37	14.7	15.9			4300	
17	唐津	搥鉢	18C	34	13.5	13.4			3000	
18	唐津	搥鉢	18C	38.8	16.5	16.4			3800	7-241か
19	唐津	搥鉢	18C	35	15.2	12.9			3600	付札: 名称スリ鉢/宿根木/55年5月24日/清九郎 寄贈
20	唐津	搥鉢	18C	34	15	14.7			3450	

21	唐津	小壺	17C	13.7	19.5	12	16.4		1500	壁棚上段
22	唐津	小壺	17C	16	20.5	13.6	20.4		2100	付札：46.4.30 古堂（?地） 琴浦勘十郎 つぼ2ノ内1
23	唐津	小壺	17C	18.2	28	18.2	23.2		3050	17世紀前半
24	唐津	片口	19C	29	11.5	11			1650	須佐唐津（山口県須佐町：萩市）
25	唐津	甕	18-19C	22.6	22	13.3	22.9		3300	13378
26	唐津	甕	18-19C	16.3	21	10.9	17.2		2550	
27	唐津	甕	18-19C	14.2	19.7	11.9	17.8		2250	
28	唐津	甕	19C	25.7	28.5	15.2	26.3		1250	
29	唐津	甕	19C	21.8	21.3	12.5	22.5		2800	
30	唐津	甕	17-18C	16.3	23.2	11.9	18.2		2500	5326
31	唐津	蓋付壺	19C	11.2 10.3	16.2	8.7	15.5	1.8	1000 100	7-148 蓋は後補
32	唐津	搦鉢	18-19C	40	13.2	17.5			4200	
33	唐津	中瓶	19-20C	4.3	25.5	7.6	11.5		1200	
34	唐津	中瓶	19-20C	4.5	22.1	6.9	11.5		1000	6551
35	唐津	大甕	18-19C	64	110	32	75		不詳	
36	唐津(武雄系)	大鉢	18-19C	42	13.2	13.5			3800	武雄窯
37	唐津(武雄系)	大鉢	18-19C	37	12.5	14			2700	武雄窯
38	唐津か	中瓶（木栓付）	19-20C	4.1	25.7	8.7	12.8		1400	6705 7-215
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	肥前（伊万里）	中瓶	19C		20	7.2	10.8		700	6597 染付
2	肥前（伊万里）	中瓶	19C		21.7	6.9	12.3		600	5022
3	肥前（伊万里）	中瓶	19C		25.3	8.8	14.2		1000	6597
4	肥前（伊万里）	中瓶	19C		22.9	9.2	15.2		1050	6601
5	肥前（伊万里）	中瓶	19C	4.3	25.8	8.8	14.6		1100	6708
6	肥前（伊万里）	中瓶	19C	4.3	26.6	8.5	14.9		1000	付札：名称 伊万里竹文德利／採集地 小木町朝日町／年月日 56年6月2日／寄贈者 笠井正昭
7	肥前（伊万里）	中瓶	19C	3.9	25.1	8	13.5		850	7-168
8	肥前（伊万里）	大瓶	19C	4.8	27.2	8.7	14.9		1150	伊万里德利（文様入）宿根木 高沢タケ 中新宅
9	肥前（伊万里）	中瓶	19C	4.6	25.9	8.4	14.4		1200	7-226 6506
10	肥前（伊万里）	大瓶	19C	4.7	27.6	9.5	15.7		1200	付札：名称 伊万里竹文德利／採集地 小木町朝日町／年月日 56年6月2日／寄贈者 笠井正昭
11	肥前（伊万里）	大瓶	19C	4.1	27.3	8.8	14.8		1000	12120
12	肥前（伊万里）	大瓶	19C	4.7	27.8	7.8	15.3		1200	11720
13	肥前（伊万里）	大瓶	19C	4.8	27.5	8.8	14.7		1100	6697
14	肥前（伊万里）	大瓶	19C	4.2	27.7	8.9	14.7		1300	トックリー升入 宿根木 56年3月19日 坂下（春日）
15	肥前（伊万里）	大瓶	19C	3.8	27.2	8.6	14.8		1050	
16	肥前（伊万里）	大瓶	19C	4	25.8	8.1	14.2		1150	6725
17	肥前（伊万里）	大瓶	20C	4.7	26.3	9.1	13.9		1250	11719
18	肥前（伊万里）	大瓶	20C	4.2	28.1	8.9	14.7		1400	
19	肥前（伊万里）	大瓶	20C	3.8	26.9	8.7	15.3		1200	6704
20	肥前（伊万里）	大瓶	20C	3.2	20.8	7.2	12		550	
21	肥前（伊万里）	大瓶	20C	4.2	26.2	8.9	14.7		1250	
22	肥前（伊万里）	大瓶	19C	4.3	26.7	9.3	14.8		1150	6726
23	肥前（伊万里）	大瓶	19C	4.4	27.8	8.7	14.4		1200	6785

24	肥前 (伊万里)	大瓶	19C	4.2	26.8	8.3	15.9	1000	6719
25	肥前 (伊万里)	大瓶	19C	4.8	28.1	7.9	15.5	1100	7597
26	肥前 (伊万里)	大瓶	19C	4.2	27.9	9.4	14.5	1250	4990
27	肥前 (伊万里)	大瓶	19C	3.9	25.3	9	13.9	900	6007
28	肥前 (伊万里)	大瓶	19C	3.9	25.7	8.4	14.5	1100	6604
29	肥前 (伊万里)	大瓶	19C	3.7	25.9	8.9	14.6	1000	6721
30	肥前 (伊万里)	中瓶	19C	3.1	20.9	7.7	12.1	600	6596
31	肥前 (伊万里)	大瓶	19C		28.8	8.8	17.4	1800	7458 口縁欠
32	肥前 (伊万里)	大瓶	19C	4.6	35.3	9.7	17.6	2000	6699 木栓付
33	肥前 (伊万里)	大瓶	19C	4.5	35.2	10.5	17.9	2100	6663
34	肥前 (伊万里)	中瓶	19C		24.6	10.5	19.2	1700	6678 木栓付 口縁欠
35	肥前 (伊万里)	大瓶	19C	5.2	29.7	12.4	17.5	1900	
36	肥前 (伊万里)	大瓶	19C	4.2	31	10.3	18.3	2000	6698
37	肥前 (伊万里)	大瓶	19C	4.1	27.1	9.5	14.7	1200	別室に展示
38	肥前 (伊万里)	中瓶	19C	3.8	25.7	8.4	14.3	1000	6608 別室に展示
39	肥前 (伊万里)	大瓶	19C	4.2	26.8	9	15.2	1200	6713 藁縄で包まれている 別室に展示
40	肥前 (伊万里)	神酒徳利	19C	3.9	30.1	9.2	10.8	1100	6656 別室に展示
41	肥前 (伊万里)	神酒徳利	19C	4.1	31.1	9.4	11.7	1200	別室に展示
42	肥前 (伊万里)	瓶	18C	3.6	17.9	5.8	9.2	300	3443 神酒徳利 宝珠付 42・43セット
43	肥前 (伊万里)	瓶	18C		17.4	5.3	8.8	300	3442 神酒徳利 宝珠付 口縁欠 42・43セット
44	肥前 (伊万里)	小瓶	19C	1.6	9.5	3.4	5.3	80	3947
45	肥前 (伊万里)	小瓶	19C	1.4	9.3	3.8	5.6	80	3948
46	肥前 (伊万里)	小瓶	19C	2	25.2	6.9	10.9	650	8460 色絵 焼継あり
47	肥前 (伊万里)	神酒徳利	19C	1.8	11.9	4	5.2	100	3954 神酒徳利 宝珠あり 47・48セット
48	肥前 (伊万里)	神酒徳利	19C	2	12	3.9	5.1	100	3953 神酒徳利 47・48セット
49	肥前 (伊万里)	神酒徳利	19C	2	13.3	4.6	5.8	150	3401 神酒徳利
50	肥前 (伊万里)	神酒徳利	19C	1.9	13.1	3.4	5.1	100	3399
51	肥前 (伊万里)	神酒徳利	19C	1.8	14	4.7	6.2	220	3402 蛸唐草
52	肥前 (伊万里)	神酒徳利	19C	1.9	11.7	4.3	5.3	120	9431 蛸唐草
53	肥前 (伊万里)	神酒徳利	19C	1.5	12.3	4.4	5.3	120	9432 蛸唐草
54	肥前 (伊万里)	猪口	18C	7.2	6	4		100	4589
55	肥前 (伊万里)	猪口	18C	6.8	5.3	4.4		80	4590
56	肥前 (伊万里)	猪口	18C	7	5	4.3		70	4587
57	肥前 (伊万里)	小鉢	19C	8.7	7	5		150	3455 57～59セット
58	肥前 (伊万里)	小鉢	19C	8.5	7	5.3		150	3452 57～59セット
59	肥前 (伊万里)	小鉢	19C	8.3	7	5		150	3453 57～59セット
60	肥前 (伊万里)	小鉢	19C	8	6	4.2		110	12965
61	肥前 (伊万里)	仏花瓶	18C	8.3	15.2	5.7	8.2	500	7746 青磁
62	肥前 (伊万里)	仏花瓶	19C	7	15	6.7	7.2	350	7744 色絵
63	肥前 (伊万里)	中碗 (蓋付)	19C	10.7	6.2	4.3		200	4520 染付
64	肥前 (伊万里)	中碗 (蓋付)	19C	10.7	6.5	4.2		200	8533
65	肥前 (伊万里)	中碗 (蓋付)	19C	10.2 8.7	6 2.4	4		150 (身) 60 (蓋)	3294 志太
66	肥前 (伊万里)	中碗 (蓋付)	19C	10.7 9.0	6 2.4	3.8		180 (身) 70 (蓋)	10477
67	肥前 (伊万里)	中碗 (蓋付)	19C	10.3 9.2	6 2.7	4.6		160 (身) 60 (蓋)	3291
68	肥前 (伊万里)	中碗 (蓋付)	19C	11.2 10.0	5.9 3.1	3.9		150 (身) 70 (蓋)	3451 73～75セット

69	肥前 (伊万里)	中碗 (蓋付)	19C	11.3 9.8	6.2 2.8	3.9			170 (身) 80 (蓋)	1450 73~75セット
70	肥前 (伊万里)	中碗 (蓋付)	19C	11.2 10	6.3 3.7	4			180 (身) 70 (蓋)	3449 73~75セット
71	肥前 (伊万里)	中碗	20C	11.6	8.4	5			400	3468
72	肥前 (伊万里)	小瓶	18C	1.3	13.2	4.4	6.5		150	神酒徳利
73	肥前 (伊万里)	小瓶	19C	1.3	11.5	3.7	5.3		100	神酒徳利
74	肥前 (伊万里)	猪口	18C	8.2	6	6.7			250	
75	肥前 (伊万里)	杯洗	19C	17.8	12.8	8.6			800	
76	肥前 (伊万里)	杯洗	19C	12.9	8.4	7.1			350	3382
77	肥前 (伊万里)	杯台	19C	9	4.1	5.5			150	3335
78	肥前 (伊万里)	杯台	19C	3.5	5.4	5	7.5		200	
79	肥前 (伊万里)	杯台	19C	4.1	6	5.1	8.3		180	3325
80	肥前 (伊万里)	杯台	19C	4.5	6.1	4.5	8.9		180	3322
81	肥前 (伊万里)	杯台	19C	4.1	4.8	5.5	9.5		100	3320
82	肥前 (伊万里)	杯台	19C-20C	4.8	9.2	6.5	7.3		250	3321
83	肥前 (伊万里)	杯台	19C-20C	4.9	6.9	7.9	7.2		200	
84	肥前 (伊万里)	杯台	20C	4.8	2.4	5.3	11.2		150	
85	肥前 (伊万里)	大皿	17-18C	32.2	5.3	17.8			1600	肥前 1670-1740年代
86	肥前 (伊万里)	中鉢	18-19C	22.2	8.2	11.7			900	7-135 肥前 1760-1860年代
87	肥前 (伊万里)	小皿	18-19C	13.6	3.8	8.6			300	
88	肥前 (伊万里)	小皿	18-19C	13.7	3.4	8			260	
89	肥前 (伊万里)	中皿	20C	16.6	6.2	7.8			480	
90	肥前 (伊万里)	中皿	20C	20	6.2	9.7			650	
91	肥前 (伊万里)	鉢	20C	19	6.9	10			700	
92	肥前 (伊万里)	小皿	20C	11.5	2.8	5.9			100	12999
93	肥前 (伊万里)	小皿	20C	12.8	2.3	7.2			200	
94	肥前 (伊万里)	小皿	20C	13.3	2.5	6.6			150	
95	肥前 (伊万里)	小皿	20C	12.8	2.2	7.3			200	
96	肥前 (伊万里)	小皿	20C	13.2	2.6	6.8			180	
97	肥前 (伊万里)	小皿	20C	11	2.1	6.3			150	
98	肥前 (伊万里)	小皿	20C	10.6	1.8	6.3			100	13007
99	肥前 (伊万里)	小皿	20C	13.2	2.4	6.6			200	
100	肥前 (伊万里)	小皿	20C	14.2	2.2	7.6			180	
101	肥前 (伊万里)	鉢	19C	16.8	9.8	6.5			650	3280
102	肥前 (伊万里)	小皿	20C	14.6	3.8	8			250	129・130セット
103	肥前 (伊万里)	小皿	20C	14.5	4.2	8.3			250	129・130セット
104	肥前 (伊万里)	小皿	20C	10.3	2.4	5.3			100	
105	肥前 (伊万里)	小皿	20C	15.1	2.9	8.5			300	
106	肥前 (伊万里)	小鉢	20C	13.5	5	6.2			250	
107	肥前 (伊万里)	角皿	19-20C	14.9	3.8	8			350	
108	肥前 (伊万里)	角皿	19C	17.1	3.1	8.3			350	
109	肥前 (伊万里)	段重	19-20C	11	16.5				1450	三段重箱 一段高4.0
110	肥前 (伊万里)	小碗	19-20C	6.9	5.2	3.1			100	
111	肥前 (伊万里)	小碗	19-20C	7.4	5.8	4			150	
112	肥前 (伊万里)	小瓶	20C	1.3	10.9	2.6			50	
113	肥前 (伊万里)	小瓶	20C	1	10.8	3			50	
114	肥前 (伊万里)	小瓶	20C	1.8	12.7	3			100	
115	肥前 (伊万里)	灰吹	20C	5.5	8.7	5.2			200	
116	肥前 (伊万里)	香炉	20C	7.6	3.8	3.7			100	
117	肥前 (伊万里)	小皿	20C	7.8	1.8	5.9			50	
118	肥前 (伊万里)	花入	19-20C	12.2	31.2	11.7			1800	6757

119	肥前（伊万里）	仏花瓶	20C	5.7	12.6	5.4	5.8	150	01-092 付札：品名 花立（久谷風）／収蔵年月日 13年6月6日／寄贈者 小木町（ハーバー）桃井清右エ門 232・233セット
120	肥前（伊万里）	仏花瓶	20C	5.6	12.6	5.6	5.9	140	01-092 付札：品名 花立（久谷風）／収蔵年月日 13年6月6日／寄贈者 小木町（ハーバー）桃井清右エ門 232・233セット
121	肥前（伊万里）	仏花瓶	20C	7.4	15.6	7.2	7.8	450	01-091 付札：品名 花立（紫）／収蔵年月日 13年6月6日／寄贈者 小木町（ハーバー）桃井清右エ門
122	肥前（伊万里）	朝顔便器	20C				26.3	10150	最大長：58.5
123	肥前（伊万里）	小杯	20C	5	2.9	1.9		30	
124	肥前（伊万里）	小杯	20C	4.9	2.9	1.8		40	
125	肥前（伊万里）	段重	20C	13.1	17.8	9.5		1450	一段分高さ：4.2
126	肥前（伊万里）	大皿	19-20C	24	3.5	14.7		650	小木町旭町 56年6月21日 笠井正昭
127	肥前（伊万里）	大皿	20C	21	3.6	12.4		600	
128	肥前（伊万里）	角皿	19C	24	4.8	13.4		900	小木町中立町 55年5月28日 とき寿司 佐藤辰男
129	肥前（伊万里）	大皿	20C	34.5	5.7	18.7		1650	
130	肥前（伊万里）	大皿	19C	37	4.5	21.1		1800	
131	肥前（伊万里）	大皿	19-20C	46.8	4.3	29		3250	
132	肥前（伊万里か）	小鉢	19C	7.6	7	4.3		120	11584 62～63セット
133	肥前（伊万里か）	小鉢	19C	7.3	7	4.2		110	11583 62～63セット
134	肥前（伊万里か）	小鉢	19C	7.2	7	4		110	11582 62～63セット
135	肥前（伊万里か）	小皿	19C	14.4	4.2	4.8		200	113～115セット
136	肥前（伊万里か）	小皿	19C	14.2	4.2	4.8		200	113～115セット
137	肥前（伊万里か）	中皿	19C	15	4.2	5.3		250	113～115セット
138	肥前（伊万里か）	小杯	20C	4.7	2.9	1.8		30	148・149セット
139	肥前（伊万里か）	小杯	20C	4.9	2.8	1.7		30	148・149セット
140	肥前（伊万里か）	小杯	20C	5.5	2.9	1.8		25	150・151セット
141	肥前（伊万里か）	小杯	20C	5.4	3.2	1.9		25	150・151セット
142	肥前（伊万里か）	小杯	20C	4.9	3	1.9		25	152～154セット
143	肥前（伊万里か）	小杯	20C	4.8	2.8	1.7		25	152～154セット
144	肥前（伊万里か）	小杯	20C	5.1	2.7	1.7		25	152～154セット
145	肥前（伊万里か）	小杯	20C	5.4	3.2	2.1		25	155・156セット
146	肥前（伊万里か）	小杯	20C	5.4	2.9	2.2		25	155・156セット
147	肥前（伊万里か）	小杯	20C	5.6	3	2		23	157～159セット
148	肥前（伊万里か）	小杯	20C	5.4	3	2.2		23	157～159セット
149	肥前（伊万里か）	小杯	20C	5.6	3	1.9		23	157～159セット
150	肥前（伊万里か）	小杯	20C	5	3	1.9		25	
151	肥前（伊万里か）	小杯	20C	6.8	4.7	2.9		70	
152	肥前（伊万里か）	小杯	19C	5.6	4.3	2.8		70	162～166セット
153	肥前（伊万里か）	小杯	19C	5.2	4.3	2.5		70	162～166セット
154	肥前（伊万里か）	小杯	19C	5.6	4.3	2.6		70	162～166セット

155	肥前 (伊万里か)	小杯	19C	5.2	4.3	2.7			60	162~166セット
156	肥前 (伊万里か)	小杯	19C	5.4	4.2	2.6			60	162~166セット
157	肥前 (伊万里か)	小杯 (軍隊杯)	20C	7.3	2.9	3			50	3350 167・168セット
158	肥前 (伊万里か)	小杯 (軍隊杯)	20C	7.8	3.2	2.7			60	3349 167・168セット
159	肥前 (伊万里か)	小杯 (軍隊杯)	20C	6.8	3.2	2.2			50	3348 満洲独立守備記念
160	肥前 (伊万里か)	小杯 (軍隊杯)	20C	5.8	2.8	2.1			60	3345 歩兵除隊記念 白杵
161	肥前 (伊万里か)	小杯 (軍隊杯)	20C	7.3	3.2	2.8			50	3311 輜重兵第九大隊 本間俊二 (名前: 底面に赤枠内に赤字)
162	肥前 (伊万里か)	小杯 (軍隊杯)	20C	5.8	3	2.1			50	支那事变記念
163	肥前 (伊万里か)	小杯 (軍隊杯)	20C	7.2	3.1	2.9			60	3351 西伯利 出征 紀年 中嶋
164	肥前 (伊万里か)	小杯 (軍隊杯)	20C	5.3	2.9	2.1			50	朝鮮歩七四記念 藤田
165	肥前 (伊万里か)	小杯 (軍隊杯)	20C	6.6	3.1	2.7			50	3313 近歩二紀年 中川
166	肥前か (不明)	小皿	19C	13.2	3.2	7.2			200	4512
167	肥前か (不明)	小皿	19C	13.6	2.7	7.3			200	3462 106~112セット
168	肥前か (不明)	小皿	19C	14.1	2.8	7.9			250	3463 106~112セット
169	肥前か (不明)	小皿	19C	14	3.2	8			250	3464 106~112セット
170	肥前か (不明)	小皿	19C	13.6	3.2	7.3			200	3460 106~112セット
171	肥前か (不明)	小皿	19C	13.5	3.2	8.3			250	3459 106~112セット
172	肥前か (不明)	小皿	19C	14	3.2	7.3			250	3461 106~112セット
173	肥前か (不明)	小皿	19C	14.3	3.4	7.7			250	3465 106~112セット
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	肥前 (波佐見)	中碗 (蓋付)	18-19C	11 10.3	6.7 3.5	4.3			220 (身) 110 (蓋)	6054
2	肥前 (波佐見)	中碗 (蓋付)	18-19C	11.2 10	7 3.2	4.7			250 (身) 150 (蓋)	3287
3	肥前 (波佐見)	中碗 (蓋付)	18-19C	11.5	7.3	4.8			250	3289
4	肥前 (波佐見)	中碗 (蓋付)	18-19C	11.5 10.3	6.3 3.3	4.7			200 (身) 150 (蓋)	11074
5	肥前 (波佐見)	中碗	18-19C	11	7.2	4.6			200	6056
6	肥前 (波佐見)	蓋	18-19C	9.1	2.6				60	
7	肥前 (波佐見)	中碗	19C	11.8	6.7	6.8			300	3306
8	肥前 (波佐見)	灰落とし	18C	12	6.9	5.7			500	灰含む重さ 8-8 3992
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	小鹿田焼	大瓶 (木栓付)	19-20C	7.5	28.2	10.8	16.9		2200	6610 7-232
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	九州	大瓶 (木栓付)	19-20C	7.1	36.7	11.5	20.2		2950	4593 7-248
2	九州	大瓶 (木栓付)	19-20C	7.9	38.5	11.5	21.2		3500	6603 7-233
3	九州系	甕	19C	20	17.3	14.5	20.6		1400	
4	九州系	甕	19C	16.1	15.8	8.2	15.6		1200	
5	九州系	甕	19C	20.7	20.5	12.3	21.7		2600	
6	九州系	甕	19C	16.5	17.3	9.7	16.3		1500	7-254
7	九州系	甕	19-20C	15.7	18.7	8.9	16.7		1600	7-252

8	九州系	壺	19-20C	18.5	17.2	10.5	19.1		1800	14483
9	九州系	壺	19-20C	18.1	17.2	8.9	18.6		1750	
10	九州系	壺	19-20C	22.3	22	12.9	23.2		3400	
11	九州系	壺	19C	14	14.2	8.7	14.3		1050	
12	九州系	壺	19C	19.6	21	13.2	21.1		2700	7-25 ?
13	九州系	壺	19-20C	22.6	21	12.3	20.7		2500	
14	九州系	蛸壺 ?	19-20C	15.2	19.1	14.7	17.3		2600	
15	九州系	練鉢	19-20C	35.9	18	18.5			6050	4509
16	九州系	水注	19-20C	8.1	31	11.5	18.5		2750	6711
17	九州系	壺 (注口付)	19-20C	11.1	25.7	19.9	25.3		4950	
18	九州系	壺 (注口付)	19-20C	12	35	13.5	20.1		6000	6727 7-167
19	九州系	壺(蛇口付き)	19-20C	28.3	35.2	13.8	30.5		6050	7-25 ?
20	九州系	壺	19-20C	23.9	24.7	14.2	26.3		7150	
21	九州系	壺	19-20C	23.3	19.5	13.2	24.5		2350	
22	九州系	油德利	19-20C	2.1	19.1	6.5	9.8		500	
23	九州系	土瓶	19-20C	11.5 12.1	12.9	8.7	16.9	2.8	850 150	46年11月10日 新田 ふみやか
24	九州系	酒瓶	19-20C		26.3	7.7	13.2		1200	3867
25	九州系	湯たんば	20C				13.5	9.5	2200	6801
26	九州系	灰落とし	19-20C	14.5	16.3	9	15.3		1300	
27	九州系	大瓶 (木栓付)	19-20C	6.3	34.5	12.9	19.5		3400	
28	九州系	大瓶	19-20C	7.3	29.2	14.5	16.3		2400	ひも付き
29	九州系	大瓶	19-20C	3.9	26	10.1	9.8		950	12125
30	九州系	中瓶	19-20C	3.3	18.2	7.3	8.6		500	6652
31	九州系	中瓶	19-20C	3.3	18.6	7.2	9.6		500	6671 7-308
32	不明 (九州系)	壺	19-20C	24.8	29.7	15.9	25.8		5400	
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	壺屋	壺	19C	12.5	42	16.7	26.2		6900	7-235
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	中国	四耳壺	8-19C		28	10.5	21.8		2800	1219小木
番号	産地	器種	時代	口径 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	不明	耳付壺	20C ?	7.2	17.2	8.5	10.2		650	
2	不明	蓋付鉢	20C ?	12.6 13.4	6.2 2.8	7.1	13.2		350 (身) 250 (蓋)	
3	不明	杯台	20C	4.9	6.3	4.6	6.5		160	
4	不明	杯台	20C	6	6.1	6.6	8.3		260	
5	不明	杯台	20C	3.9	5	4.1	6.6		60	9373
6	不明	杯台	20C	4.3	4.1	4.6	9.8		190	
7	不明	小碗	20C	5.5	6.8	3.3			150	
8	不明	杯	20C	5.2	7.8	3.6			100	13076
9	不明	杯	20C	4	6.2	3			50	
10	不明	燗德利	19C	4.6	25	8.7			800	11718
11	不明	燗德利	20C	4.4	24.9	8.5			700	6598
12	不明	燗德利	20C	4	21.9	8.4			450	6679
13	不明	燗德利	20C	3.7	21.8	7.4			350	6676
14	不明	燗德利	20C	5.5	24.6	9.2			750	6661 付札：酒とっ くり／小比之／45年 10月30日／辻堂
15	不明	燗德利	20C	3.9	22.4	7.4			350	6680
16	不明	燗德利	20C	2.8	19.3	6.5			350	
17	不明	燗德利	20C	2.9	18.6	5.8			200	印判
18	不明	燗德利	20C	3	18.5	6			200	印判
19	不明	燗德利	20C	2.8	18.3	5.7			200	印判
20	不明	燗德利	20C	3.3	17.4	5.9			200	3405 印判
21	不明	燗德利	20C	3.3	18.1	5.6			220	印判
22	不明	燗德利	20C	3.2	17.5	5.9			250	印判
23	不明	燗德利	20C	3.1	18.5	6.7			250	6613 印判 底面に 墨書「幸」
24	不明	燗德利	20C	2.8	18.3	6			200	6617 印判

25	不明	爛德利	20C	3.3	22.5	7.2			500	6673 印判
26	不明	猪口	19C	7.2	6.2	5			150	3432 印判 209～ 214セット
27	不明	猪口	19C	7.2	6.4	5			150	3433 印判 209～ 214セット
28	不明	猪口	19C	7.5	6.2	5			150	3434 印判 209～ 214セット
29	不明	猪口	19C	7.5	6.2	5			150	3431 印判 209～ 214セット
30	不明	猪口	19C	7.2	5.9	5			160	3437 印判 209～ 214セット
31	不明	猪口	19C	7.4	6	5.1			160	3435 印判 209～ 214セット
32	不明	千代香	20C	6.6	15.5		14.3		500	3373 付札：ソバツ ユ／白坂町／47年7 月15日／白木屋
33	不明	千代香	20C	6.4	17.3	7	13.7		550	3377 付札：そば徳 利（口付）／宿根木 ／46年11月5日／佐 藤九郎平
34	不明	千代香	20C	4.1	14.9	6.4	12.4		400	3384 付札：そば徳 利（口付）／宿根木 ／46年11月5日／佐 藤九郎平
35	不明	千代香	20C	4	14.3	6.5	11.7		360	11722
36	不明	千代香	20C	4.1	14.5	6.4	11.3		380	11721
37	不明	千代香	20C	4.3	14.8	6.2	12.1		450	
38	不明	酒瓶	20C	3	28.4	10.4	11.9		1500	加藤酒造店（澤根）
39	不明	酒瓶	20C	3.4	36.6	10.7	11.7		1350	真野村 渡辺酒造店 電話二十二番
40	不明	酒瓶	20C	3.5	34.6	10.9	11.6		1300	今井酒店（畑野） 電話四十八番
41	不明	酒瓶	20C	3.3	28.9	11.7	12.2		1500	入船町 高橋商店
42	不明	中瓶	20C	3.6	21.8	9.3	14.5		900	6718
43	不明	壺（蓋付）	20C	15 16.7	20 3	14.3	21		2100 400	
44	不明	壺	19-20C	16.7	16.9	11.3	17.5		1500	小木町山田ハツ（底面 書き込み）
45	不明	壺	19C	23.9	28.7	17.5	26.7		8100	
46	不明	壺	20C	19.5	24.3	16.5	22.5		3350	
47	不明	蒸留器	20C	11.1	38	17.9			9250	7-243
48	不明	土瓶	19-20C		10.7	7.8	12.7		400	蓋含む
49	不明	土瓶	19-20C		10.3	11.2	19.3	1.8	1050 150	7-175 赤栗（相川）？ 47.2.3
50	不明	土瓶	19-20C	10	9.7	5.3	16.9		650	14701
51	不明	土瓶	19-20C	8.5	9.4	6	19.5		650	
52	不明	尿瓶	19-20C		12.3	12.9	16.3		1600	9759 薬瓶の蓋付
53	不明	尿瓶	19-20C		13.5	13.4	16.2		1500	11348
54	不明	火鉢	20C	20.7	17.8	18.5			5200	灰含む重さ 5308
55	不明	小壺	20C	13	10.9	9.5	12		700	13845 ハマ町児玉 屋
56	不明	蛸壺	20C	13.2	25.7	12	15.5		3150	
57	不明	手あぶり	20C		18.5		17.8		1700	
58	不明	手あぶり	20C		19.6		20		2100	
59	不明	ひょっとこ	20C					3.5	350	長さ：21.6
60	不明	ひょっとこ	20C					3.3	300	長さ：19
61	不明	十能	20C				16.3		600	長さ：25.2
62	不明	十能	20C					3.3	600	長さ23.3 6407

63	不明	灰吹	20C	14.3	13	15.7			900	宿根木 46.1.16? 市左衛門
64	不明	灰吹	20C	17	9	16			950	
65	不明	焔炉	20C	22.3	6.3				1300	
66	不明	炬燵	20C		16.5				4200	長さ : 23 11665
67	不明	炬燵	20C		20.5				5600	23×22.5
68	不明	炬燵	20C		15.5		17.9		1850	6415
69	不明	風炉	20C	16.2	16.8	13.3			1400	
70	不明	行平鍋	19-20C	13.5 10.3	5.3	6		3.2	250 100	3385 7-20
71	不明	行平鍋	19-20C	15.3 13.6	6	7		3.3	400 200	
72	不明	行平鍋	19-20C	14.5 13	6.2	7.5		2.3	350 200	3436 7-18
73	不明	行平鍋	19-20C	10.2 9	4.3	5		2.2	150 50	3369 7-19
74	不明	行平鍋	19-20C	17.4 16.4	7.6	7.5		4.2	750 350	3440 7-21 C17
75	不明	瓶	19-20C	4.5	25.8	7.2	14.5		1350	6667 7-20
76	不明	中瓶(木栓付)	19-20C	6	10.7	12.3	15.5		2300	
77	不明	手あぶり	19-20C		20.3		18		2000	2302
78	不明	羽釜 (蓋付)	19-20C	18.5	11.3	13.9	23.3		900	
79	不明	ごま炒り	20C		24.5		10.3	3.2	250	315
80	不明	燗付け	20C	4.5	15.9		7.1		150	3374 7-11

佐渡國小木民俗博物館收藏資料目錄Ⅰ〈陶磁器編〉

令和4年度國學院大學大学院博物館学コース
博物館学専門・特殊実習 夏季集中実習報告書

発行日 2023年3月31日

編集 國學院大學博物館学研究室

発行所 東京都渋谷区東 4-10-28

TEL／FAX 03-5466-0268

